

香川県綾歌郡綾歌町

快天山古墳発掘調査報告書

2002

綾歌町教育委員会

香川県綾歌郡綾歌町

快天山古墳発掘調査報告書

2002

綾歌町教育委員会



快天山古墳近景（右くびれ部から後円部を望む）



快天山古墳出土遺物（銅鏡、装身具類）

発刊にあたって

この度、京都大学考古学研究室の調査に基づく『快天山古墳調査報告書』が刊行される運びになりました。大変ありがたく、うれしく思っているところであります。

快天山古墳は、古くから地元ではよく知られた古墳であり、部分的な踏査が行われ、記録も残っておりますが、学術的な調査は手付かずのままであります。昭和20年代に入って、香川県教育委員会によって本格的な調査が実施され、引き続いて昭和26年京都大学考古学研究室の調査が行われたのであります。この両度にわたる調査によって、快天山古墳が3基の割竹形石棺を持つ古墳時代前期の貴重な前方後円墳であることが明らかになり、全国的にその存在が知られるようになりました。

今回、京都大学の調査報告書が刊行されるについては、快く資料を提供され、玉稿をいただいた京都大学名誉教授樋口隆康氏、労をいとわず編集作業を快諾された広島大学大学院教授古瀬清秀氏、石棺を中心として学術的な価値を論じられた香川県歴史博物館学芸課長渡部明夫氏、本年度(平成13年度)墳丘の全面測量をお願いした徳島文理大学文化財学科講師大久保徹也氏のご好意がありました。これらの方々をはじめとする関係者の方々に心から感謝申し上げます。

快天山古墳は、遠い昔、この地に絶大な権力者がいた証であります。同じく町内に位置する県指定史跡「陣の丸古墳」とともに貴重な文化財であり、町の誇りであります。

本報告書が考古学に関心をもつ多くの方々に広く活用されますよう願いたしますとともに、刊行を契機としてさらに学術的な関心が高まり、将来、快天山古墳が復原された姿で公開できる日の来ることを期待して、ごあいさつとします。

平成14年3月

綾歌町長 二 神 正 國

凡 例

1. この報告書は、昭和 26 年に京都大学文学部考古学教室梅原末治教授が実施した、香川県綾歌郡綾歌町栗熊東字若狭に所在する快天山古墳の発掘調査報告書である。
2. 本文（第 1～4 章）の執筆と図版、挿図の作成は京都大学文学部考古学教室樋口隆康講師（当時）が行った。今回の報告書作成に当たっては、当初の原稿作成時より相当時間が経過しているが、調査当時の雰囲気そのまま伝えるため、内容にほとんど手を加えずに収録した。ただし、本文中の遺物解説、図版、挿図の一部については、編集者が支障のない範囲で改変を加えている。挿図の縮尺表示等に不揃いがみられるのもそのためである。
3. 今回の報告書作成に当たって、徳島文理大学文学部大久保徹也講師が中心となって、快天山古墳の詳細な地形測量を実施した。また 3 基の刳抜き式石棺についての歴史的な位置づけを、香川県立歴史博物館の渡部明夫学芸課長に依頼した。それぞれ今回新たに章を設けて収録した。
4. 出土遺物については今回新たに、編集者と広島大学文学研究科考古学専攻大学院生が香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館に所蔵する銅鏡、鉄器類ほかの資料調査を実施した。
5. 本報告書の編集は広島大学大学院文学研究科古瀬清秀が担当した。図版、挿図の点検と作成は同研究科考古学専攻大学院生打田知之が中心となって行った。

目 次

報告書作成に至る経緯	1
第1章 序説	3
第2章 古墳の位置と背景	4
1. 古墳の位置	4
2. 環境	4
3. 付近の遺跡	4
第3章 古墳の構造	6
1. 墳丘外形	6
2. 内部構造	7
第4章 遺物	20
1. 装身具	20
2. 武器	22
3. 農工具	24
4. 土製品	25
付章1 快天山古墳測量調査略報	27
1. 2001年度の墳丘測量調査	27
2. 快天山古墳の墳形に関する既往の理解	27
3. 快天山古墳の墳丘形態と規模	28
付章2 快天山古墳石棺の再検討及び最近の刳拔式石棺の調査例について	33
1. 快天山古墳石棺の再検討	33
2. 岩崎山4号古墳の刳拔式石棺について	37
3. 刳拔式石棺の最近の調査について	38

報告書作成に至る経緯

1951(昭和26)年、京都大学文学部考古学教室の梅原末治教授が津田町岩崎山第4号古墳および綾歌町快天山古墳の発掘調査を実施した。前者の現場の発掘は樋口隆康講師が担当して、10月13日～21日の延べ9日間、後者は主に同教室員の横山浩一氏が担当し、3月10日から短時日間、出土遺物及び遺構の一部の再調査が行われた。この間、地元から調査に参加した、当時香川大学学生であった六車恵一氏(元長尾小校長、大川町在住)は後に、中学校教員として歴史教育に携わるようになり、香川県の文化財調査と研究に取り組むうちに、両古墳の重要性を改めて再認識し、調査後も未刊のままであった調査報告書が一日も早く出版され、発掘調査の詳細な内容や意義付けが公開されることを望むようになった。ちょうど1960年ごろになり、樋口助教授(当時)から諸般の事情から刊行に至っていないが、古墳の調査報告書について原稿がほぼ出来上がっていることを知らされた六車氏はこの後、両町教育委員会に発掘調査報告書の刊行を働きかけることとなった。この六車氏の奔走と両町の理解によって、ようやく刊行の方向に動き出したのが2000(平成12)年のことであった。

同年6月27日、それまでに六車氏から報告書作成について何度か相談を受けていた古瀬清秀(当時、広島大学文学部助教授)は、綾歌町教育長土岐道憲氏、津田町教育長堀井正和氏、津田町教委課長奥田隆司氏3名の広島大学考古学研究室への訪問を受け、報告書の編集作業を担当することになった。同時に、香川県の石棺研究の第一人者である渡部明夫氏(香川県立歴史博物館学芸課長)も報告書作成作業に加わるようになった。

同年7月4日に土岐、堀井、奥田、六車、渡辺、古瀬が京都市にある泉屋博古館に樋口館長(京都大学名誉教授)を訪ね、両古墳発掘調査時の図面類、写真類、原稿、その他一括を借用し、本格的に報告書作成に向けての活動を開始することになった。その後、奥田課長が他部署に移動したので、後任の六車正徳課長が古瀬との交渉を担当することとなった。

なお、編集過程で快天山古墳の墳丘測量図が欠失していることがわかり、さらに岩崎山第4号古墳についても等高線が1m間隔の測量図であったので、両町から調査費補助を受けて、地形測量の再調査を実施することにした。快天山古墳については徳島文理大学の久保徹也講師が同大学学生・大学院生とともに、2001(平成13)年4～5月の延べ15日間、岩崎山第1・4号古墳については古瀬が広島大学大学院生とともに、2002(平成14)年1月24日～2月5日までの延べ13日間をかけて、両者とも25cm間隔の等高線で測量を実施した。また、樋口氏原稿の参考とするために、両古墳の出土資料について古瀬と広島大学大学院生が、快天山古墳関係は香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館において、岩崎山第4号古墳関係は津田町立郷土資料館において、実測図作成、写真撮影などを実施した。

報告書作成にあたりましては、泉屋博古館樋口隆康館長、綾歌町土岐道憲教育長・新居 勉同

町教委係長、津田町堀井正和教育長（現収入役）・田中繁則現同町教育長・奥田隆司同町教委課長（現商工観光課長）・六車正徳現同町教委課長、古墳土地所有者の方々、渡部明夫（香川県立歴史博物館学芸課長）、宮谷昌之（香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館館長）・溝淵茂樹同館調査普及課長・松岡宏一同館主任技師、大久保徹也（徳島文理大学文学部講師）・同大学学生諸氏、広島大学大学院学生楨林啓介・敦賀啓一郎・打田知之・八幡浩二・加藤 徹・唐津彰治・吉川裕幸、六車恵一（元長尾小校長）、山本一伸（寒川町教委主事）、阿河鋭二（大川地区広域行政振興整備事務組合）ほか多くの方々、関係諸機関に大変お世話になりました。記して謝意を表したいと思います。

第1章 序 説

香川県綾歌郡綾歌町栗熊の快天山古墳は、その墳頂に石棺蓋の一部が露出していたことにより、早くからその存在が知られていた。しかし、その内部構造については、長い間調査せられないままであったが、戦後になって、全国的に盛んとなった古代遺跡発掘の気運に乘じ、本墳もまた地元の人々によって発掘せられることになった。

すなわち、昭和25年7月、当時の久栄中学校校長大林英雄氏が香川県名勝天然記念物調査委員会の和田正夫、松浦正一氏らと共同で調査を実施し、まず、天井部がすでに露出していた第1号石棺の発掘から始め、棺外から種々の遺物を採集した。その際、別に2つの石棺が埋められているのを見つけ、それぞれからまた各種の遺物が出土した。和田正夫氏は、直ちにこの調査の概要を「香川県教育委員会月報¹⁾」に発表した。

梅原末治教授はたまたまこの報告を読んで、本古墳の内容の重要さを知り、現地調査の必要を認めたので、昭和26年3月10日、京都大学考古学教室の横山浩一氏を帯同して現地に赴き、県調査会の援助のもとに、出土遺物並びに遺構の一部を再調査する機会を得た。もっとも我々の調査は短時日の滞在であったため、第1号石棺東側を発掘してその構造を確かめ、一部の遺物を採集することにとどまったが、その際、横山氏が墳丘の測量と石棺の実測を行った。

したがって、本墳の現地調査は、大部分が地元の人々によってなされたものであり、その調査の経過と概要は、香川県の報告書²⁾に詳述してある。しかし、該報告書は不備や、一部記述の誤謬や未記録の資料なども認められるので、ここに再録して、本古墳の実態を明らかにしたいと思う次第である。

第2章 古墳の位置と背景

1. 古墳の位置

香川県の主要部を形成する讃岐平野³⁾は、南の讃岐山脈、北の瀬戸内海に接した複合扇状の沖積平野で、その間に花崗岩層を基盤とした古い地塊が断続して存在し、大川平野・高松平野・丸亀平野・三豊平野の4地形区に分かれている。

快天山古墳は丸亀平野（または仲多度平野ともいう）の東を限る群立する孤峰のうち、城山^きの南に続く横山山塊の西南方に延びた尾根の先端に位置している。この横山とその南の大高見峰両山塊が相接する部分は、狭い羽床^{はゆか}地峡となっているが、この地峡には、古くより金比羅参りで知られた琴平街道が通っていて、高松へ通じる。今は琴平電鉄高松線が走っている。この地峡の西入口の北側、山麓の高添集落背後の松林に覆われた台地上に古墳がある。したがって、古墳の北方は尾根伝いに横山山塊の最高所へ続き、南は狭い低地を隔てて堤山、栗熊の山地へと相対し、東は地峡を抜けて、綾川の溪谷へ通じ、ただ西方のみが開けて、仲多度平野に面している。

今、墳丘の上に3基の無縫塔⁴⁾が並んでいる。これらは碑銘によって、元この山の南麓にあった円福寺の住職の墓であることが知られるが、このうちもっとも大きな北塔の快天墓にちなんで、この山の名が取られたことが分かる。

2. 環境

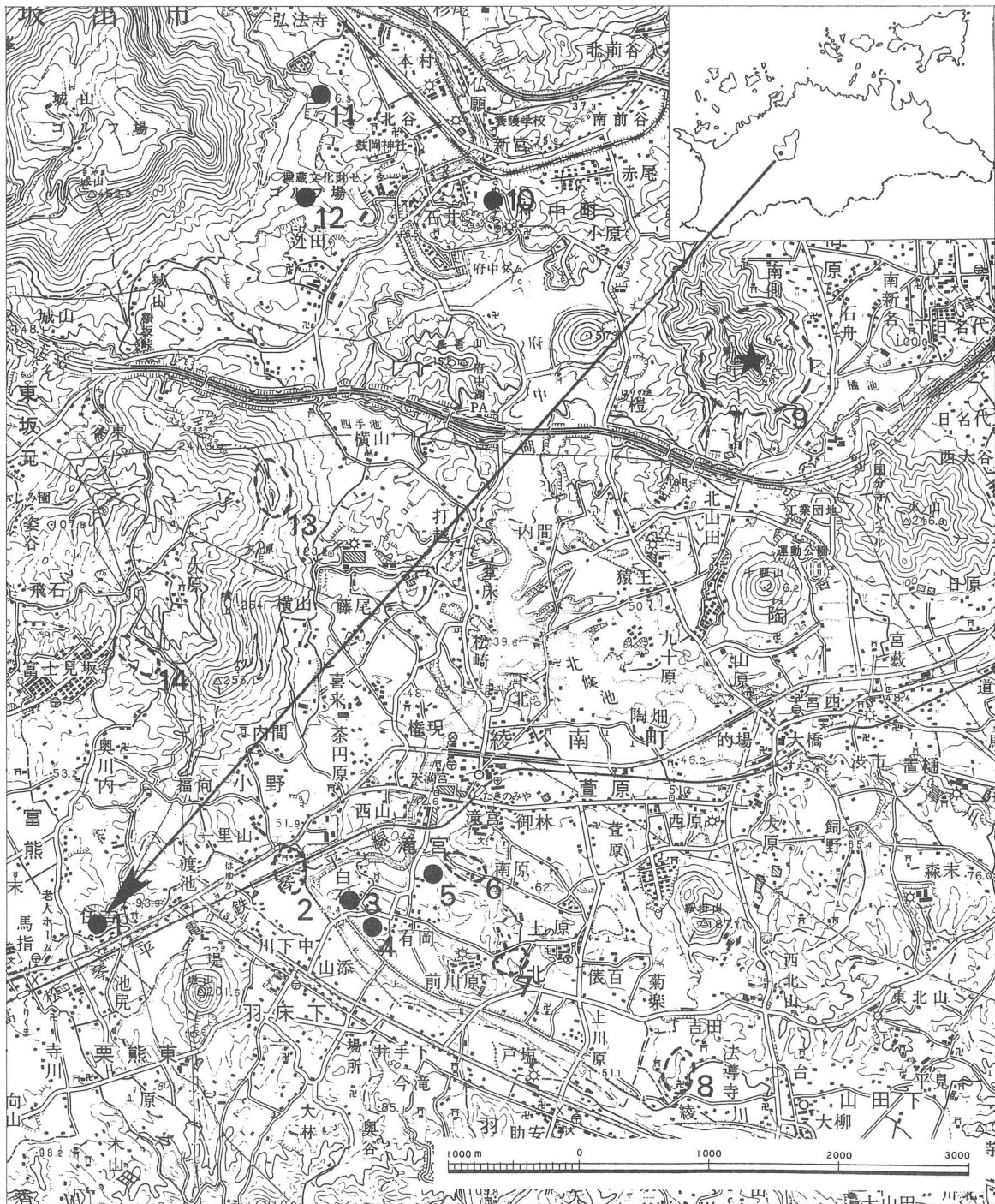
丸亀平野は土器川の氾濫によって形成された沖積平野で、坂出・丸亀・多度津・善通寺・琴平の5市町を含む人口の周密な地域にある。平地には溜池が多く、散村形集落が発達し、全体に条里制の地割りがよく残っていて、古来、早くから開けていたことが知られる。

3. 付近の遺跡

北の山塊城山は、天智天皇の治世に対韓政策の防波堤として築かれた山城で、記紀にも録された著名の地である。近年は東の国分台とともに、ここに産する安山岩を使った無土器時代の石器の出土地として、特に注目されている。

本古墳のある栗熊村、およびその北隣の富熊村の丘陵には、弥生時代の石器や土器の出土する地点が散在し、仲多度平野を隔てた西方の大麻山^{おおあさ}（メサ）や我拜師山^{がはいし}（ビュート）にかけては銅剣・銅鐸の出土が著しいところである。

古墳時代の遺跡がまた、この付近一帯の丘陵に多いことは、『県報告書』第3図に示されている通りであるが、その内で、快天山古墳のすぐ北の尾根続きにある薬師山古墳と、東方の住吉神社裏山の古墳は近接のものとして注目され、ともに組合せ式石棺を主体としている。かくて、この地域は早くより人文の発達に恵まれたところとして、本古墳の立つ地理的・歴史的基盤の確かさを理解せしめるのである。



第1図 綾川流域の代表的な古墳

- | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|----------|
| 1. 快天山古墳 | 2. 浦山古墳群 | 3. 津頭西古墳 | 4. 津頭東古墳 | 5. 岡田井古墳 |
| 6. 岡の御堂古墳群 | 7. 滝宮万塚古墳群 | 8. 末則古墳群 | 9. 鷲ノ山石産出地 | 10. 新宮古墳 |
| 11. タイバイ山古墳 | 12. 白砂古墳 | 13. 横山古墳群 | 14. 陣の丸古墳群 | |

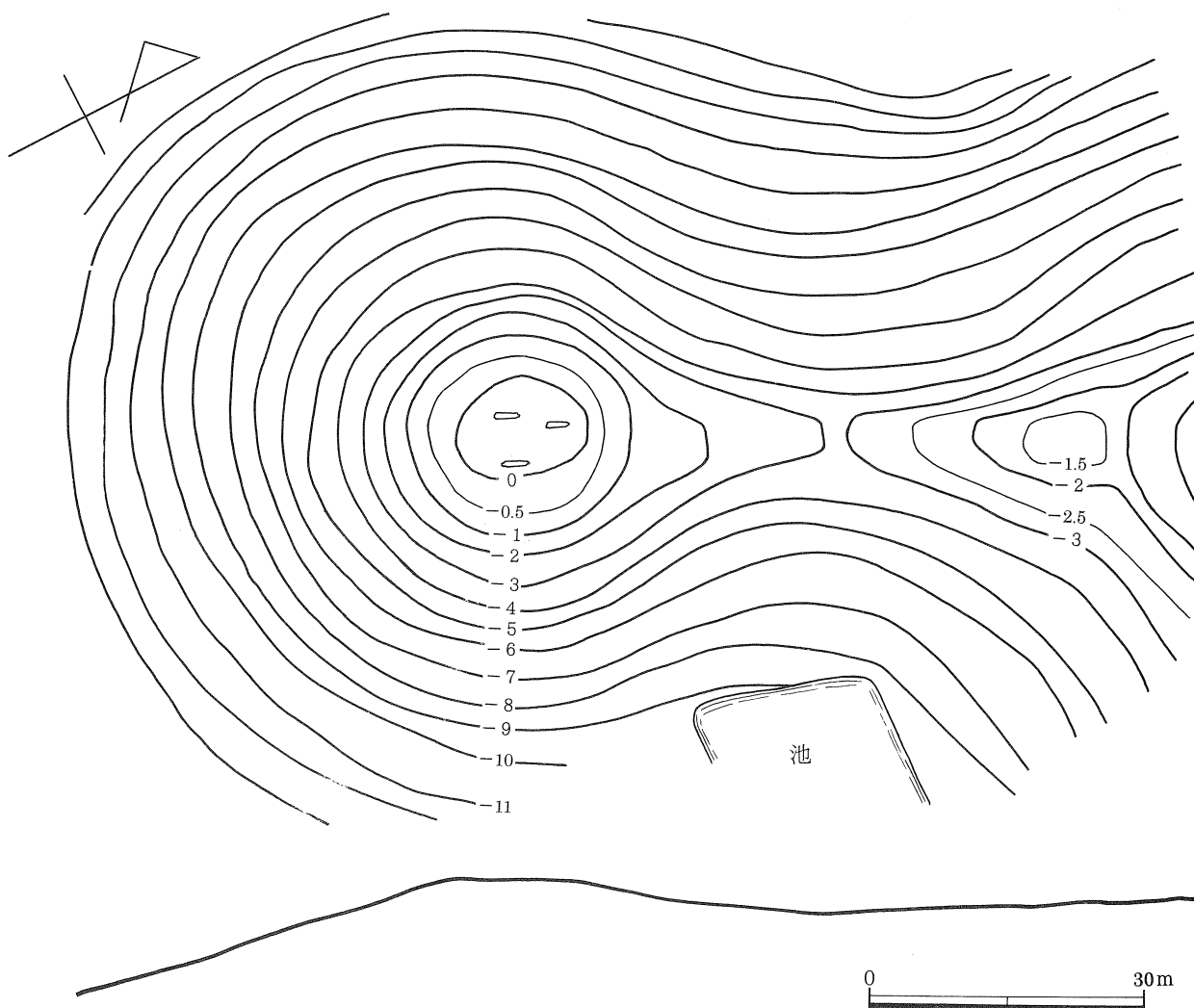
第3章 古墳の構造

1. 墳丘外形

古墳は丘陵の突端に位置し、稜線上の瘤を後円部とし、北方の尾根の基部の方向に前方部を向けた、いわゆる丘尾切断式の前方後円墳である。

現在、後円部の南斜面と西南斜面、および前方部の前半が開墾されているが、付近一帯は松林と灌木に覆われているので、比較的原形を残していると認められる。

墳丘は尾根の稜線を利用して築かれており、後円部頂部にわずかな土盛りをし、くびれ部は地山を削りなどして形を整えたと思われるが、前方部の先端は、開墾による変形もあって、北方へ続く尾根との区切りが現在では明瞭ではなく、また、山丘を利用して営まれた古墳の通例として、墳丘裾縁を平坦にするという疆域設定に対する地形上の変更を施さないために、外観だけでは、



第2図 快天山古墳墳丘地形図（昭和26年 横山浩一氏測図 写真より作成）

墳丘の形を決定することは困難である。東・西と南方が低いため、南の低地から見ると、隆然として大古墳であることが、一見して知られるが、北方の高所から見ると、単なる円墳と見誤るほどである。ただ、後述するごとく、後円部後方と前方部西側の開墾面において、葺石と埴輪の存在が知られたことから、それを裾縁として、全周の輪郭を推定することができる。

前方部の先端については、平地に築かれた前方後円墳に見るような、直に切られた斜平面をなさないで、これもはっきりしないが、墳丘の主軸線が後円部から次第に下降して、前方部開墾面の北方あたりから、逆に北に向って上昇していき、その変更点あたりに、尾根を東西へ越える小径があって、わずかに低い鞍部をなしているの、そこを一応前方部の先端と見なすことができる。

実測による墳丘の平面図を見ると、正円形をした後円部に対して、強くすぼまってくびれ部があり、それから前方部は、大きく幅を広げていくが、これは作為された墳形というよりは、むしろ北方の台地へ向って、左右の斜面が広がっていく自然の地形にしたがったものと思われる。

墳丘の東側には、裾縁に沿って、小径があり、その外下方に溜池が1つ存在する。しかし、これを濠と見なす根拠は何もない。

かくて、墳丘の大きさを計測すると、全長 100 m、後円部径 65 m、後円部の比高 9 m あり、前方部はくびれよりやや前寄りのところをもっとも低く、後円部頂より 3 m の差、前方部先端は少し高くなって、1.5 m の高低差となっている。また後円部頂は、東西 16 m、南北 20 m の平坦面をなしていること、一般の前方後円墳と同様である。

葺石と埴輪列

墳丘の全表面をめぐっていないため、葺石と埴輪列の現状を明確にすることができないが、後円部南斜面と西南斜面の開墾地において認められた知見では、墳頂より 9 m⁵⁾ 下ったあたりを外下縁として、幅 5 m くらいに、20 cm 大の栗石が墳丘の斜面を鉢巻き状に繞っていたことが分かる。また、『県報告書』によれば、前方部西側斜面においても、少量の葺石と、その間に 1 ないし 3 m の間隔で、4 個の埴輪円筒が並んでいたのを検出している。ただその位置について、記述には、「後円部の頂上から 14.5 米下った位の高さ」とあるが、同書第 1 図には 8 m 低い等高線に沿って、図示せられていて、両者の間に食い違いがある。後円部後方で見た実査からすれば、実測図の方が正しいようである。

以上の観察から推して、埴輪は墳丘の裾部に円筒列の存在したことは明らかであり、その量は少なく、一定の間隔を置いて立てられたことが知られる。

墳丘上部の埴輪列については、今日なんらの資料もない。

2. 内部構造

本墳の主体については、従来より 1 つの刳抜き式割竹形石棺（以下、石棺とのみ表記する場合はこの形式の石棺をさす）が存在することは、その蓋頂部が露出していたことによって早くより知られていたが、その後の調査によって、後円部には 3 基の石棺の埋められていることが明らか

となった。その他、前方部の先端に近いところにも、4基以上の組合せ式石棺が、開墾の際に発見されたと報ぜられている。しかし、後者についてはほとんど資料が失われてしまっているため、ここでは後円部に営まれた主体についてのみ記述する。

3 棺の配置

後円部に埋められた3基の石棺は、後円部頂平坦面の後方の左右と、前方の中央辺に、一定の間隔をおいて営まれ、しかもその方向は墳丘の主軸線とほぼ平行に置かれているので、3棺の営造の時期には先後があったにしても、当初から計画的に配置せられたものであることを推定せしめる。

すなわち、第1号石棺は後円部平坦面の東南より、既述の3基の無縫塔の列の東側にあり、第2号石棺はその正西方に、4.7mの間隔をおいて平行に位置し、墳丘の主軸線は、ほぼこの両棺の間隙を通過している。第3号石棺は、第1、第2の両棺の北端を結ぶ線から北へ2.7mのところにもその南端があるが、主軸線よりも、やや西よりに位置している。ちなみに3棺の中心点間の距離を測ると、次のごとくである。

第1号石棺と第2号石棺の中心距離	5.30 m
第2号石棺と第3号石棺の中心距離	5.90 m
第3号石棺と第1号石棺の中心距離	6.40 m

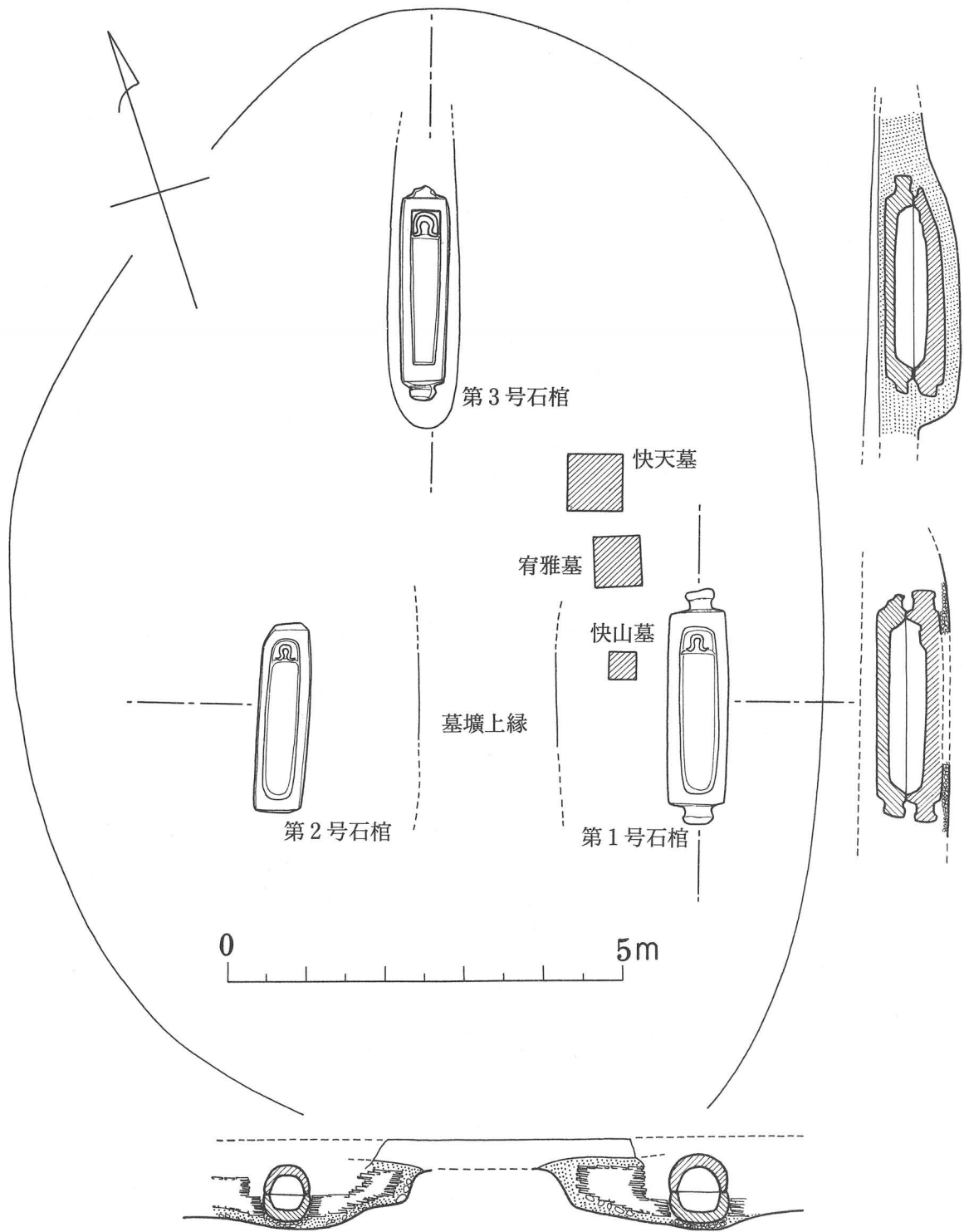
第1表 快天山古墳石棺3基の計測値

		長		幅			高	割り込み		
		含突起	体部	頭部	中央部	足部		長	中央幅	深
第1号石棺	蓋	290	250	70	80	75	43	215	55 (51)	28
	身	300	255	71	73 (77)	71 (74)	45 (42)	223 (217)	50 (52)	29 (28)
第2号石棺	蓋	266	235	60	63	60	34	210	43	20
	身		233	40 (58)	65	60	36	210	44	21
第3号石棺	蓋	287	239	57	56	46	40—34	207	40	22
	身	275	238	53	55	46	38	205	40	18

() は県報告書の数値 (単位 cm)

1. 第1主体

第1号石棺は地山をうがった土壇内に安置せられ、その周囲に板石をもって築いた石槨によって被護せられたものであるが、その構造は、上部が何回かの盗掘によってすでに破壊せられ⁶⁾、また最初の発掘者がこれらの遺構に対する十分な知識を有しなかったために、乱掘破壊が著しく、



第3図 快天山古墳後円部石棺配置図

遺存していた下部の構造に対しても不明な点が多い。今、『県報告書』や大林英雄氏の発掘時における観察記録に基づき、推測を加えながら説明してみよう。

現在、遺構は石棺の東側部において、その上半部がすでに破壊せられ、しかも遺構の位置が墳丘頂平坦面の東縁に近いところにあるので、土壙並びに石槨上方の構造ははっきりしない。しかし、石棺の西側部には、3基の無縫塔が建てられたために後世の破壊が蓋頂部のみに限られ、土壙並びに石槨の大部分が比較的良好に残っていたので、大林氏が棺の南端より北へ80 cmあたりのところで試みられたセクションによって、土壙と石槨・石棺の関係がたどられるようである。

すなわち土壙は、棺の西側において、棺身から1.50 mのところには壙壁があるので、棺が土壙内の中心に置かれていたと仮定すれば、東側もほぼ同じ間隔があったと見なし、それに棺幅を加えると、東西の幅は3.80 m前後となる。一方、南北の長さについては、棺の両端において掘り方の線を検出するに至っていないが、棺身と土壙壁との間に、西側と同じ程度の空間を認めるとすると、ほぼ5 mぐらいになるのであろう。

次に土壙の深さは、地山の上面が槨壁の最高所とほぼ同じ高さにあるので、下底までの深さは80~90 cmあったようである。土壙壁は、下底に向かって多少傾斜しているがほぼ垂直に近く、底面も周辺部においてやや上がっているが、槨の壁体の中央辺まで緩く下降して、そこから棺下までほぼ水平である。

この土壙の底面には、粘土が1層張りめぐらされている。それは、厚さ10 cmほどで、床面のみでなく、四周の土壙壁面にも及び、さらに石槨の壁体の上面も包んでいたようである。ただ、槨壁の外周には、粘土層との間に大型の河原石を一行に敷き、棺底直下には、粘土層内に、棺外底に接して、小型の礫を詰めた部分があったという。これは棺底を縦に走った排水溝の断面であるかもしれない。

石槨は平板状の安山岩を水平に積み重ねて、棺の四周を囲ったものであるが、その構造は古式古墳に通有な、いわゆる竪穴式石室のそれとは多少異なる。まず、棺の西側においては、棺身の外側の曲面に応じて、下方を内方にせり出して棺身に密接して板石を重ね、棺身の上面から3 cmばかり下がったところまで積んで、そこに1つの平面を設けて、上部に空間を残している。この石積みの高さは棺底から約30 cmほどである。次いで棺側から外方へ30 cm離れたところにおいて、さらに上方へ板石が水平に積み上げられていて、ほぼ棺蓋上面の高さまで達し、その石積みの内面はほぼ垂直な壁面をなしている。この壁体は土壙の外周の粘土層までの間に密に水平に積んであり、幅は棺側から1.45 mに達する。しかして、槨壁上半の垂直な壁と石棺の間の空間には、同じ板石が粘土と混じえて乱雑に詰め込んで詰められている。棺の東側においては、棺身に密着して水平に敷かれた石積みは残っていたが、棺とやや離れて棺蓋頂まで築いた垂直な壁面はすでに破壊せられていた。

後述するごとく、棺外の副葬品が、棺身に接して、その上口よりやや下がった石積みの上面に置かれていたことを考え合わせると、この棺身に接し築かれた石積みは壁体というよりは、むしろ床下を構成するものである。すなわち、槨室の床面は石棺の下方になくて、棺身の上口に近い

上位にあり、したがって、棺身は床の内部に埋まっていることになり、一般の石室の床の概念とは異なるようである。

石槨上方の被覆については、既述のごとく、すでに破壊せられているので、正しく原形を復元することはできない。しかし、竪穴式石室にもっとも多く見られる長方の大石数枚を横架けした式ではなかったことが、その用材が一片も検出されなかった事実によって推測される。今、槨室内には、槨壁に使われた用材と同じ板石が、乱雑に詰め込まれていたが、これが原初の構造のままだとすれば、このようにして槨室内の空間を填めた上に、同じ板石を敷いて、槨室と石槨の全体を覆うことは可能である。墳頂に並ぶ無縫塔の傍らに後世発掘した際に取り出された同じ板石が積み上げられており、これらは、現在失われている石槨東側の壁体から取り出されたものという推定が当然考えられるが、また被覆部の板石も含まれていたと見なすこともできよう。

石槨西側の観察では、壁体の上面に1層の粘土層が被っていた。したがって、槨室の上面の板石被覆の上も、粘土層で覆われていたことが推測される。とすれば、槨室内の空間を填めていた板石群は、粘土塊を混じえていたというので、あるいは初期の盗掘の際に被覆部の用材をここに遺棄したと見なすこともできる。

第1号石棺

第1号主体内に安置せられた第1号石棺は、身と蓋がほぼ同形・同大に作られ、外方の断面が半円形をなし、両端側が直に切られている点で、刳抜き式割竹形石棺の典型的なものであると見なすことができる。角閃安山岩を用いて、極めて入念に作られている。

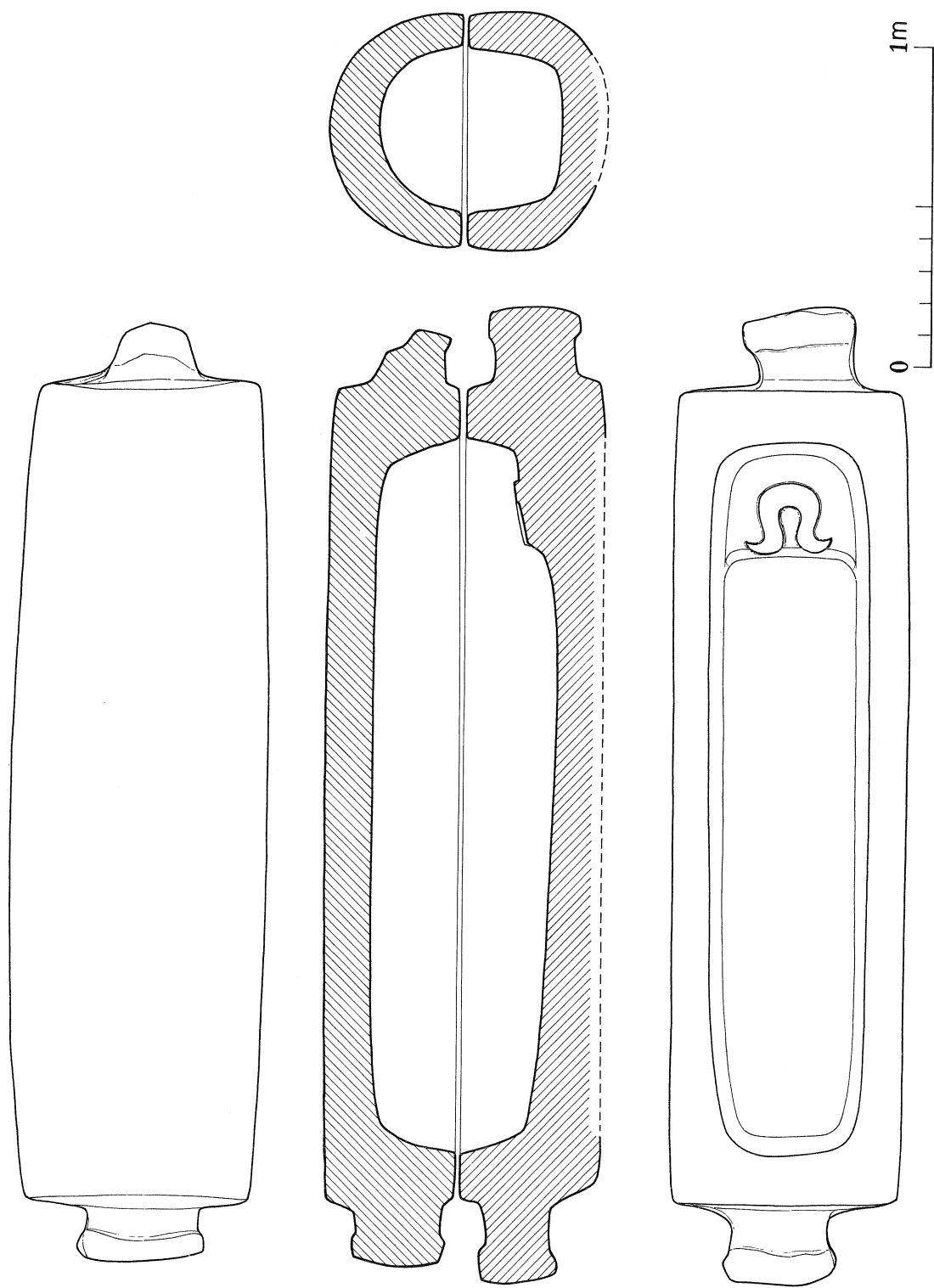
身は中央部で、幅がわずかに広がっているが、頭部と足部とは同幅である。周縁に長側部で幅12cm、短側部で幅15cmの平面を残して内部を刳り抜いてあるが、四隅を丸くし、側壁は多少傾斜している。床面は平直で、足部の方がわずかに浅いが、『県報告書』では逆に足部が深いという記述になっている。

頭部には石枕を彫りだしているが、それは内底の北端より30cmの間を床より7～8cm高くし、その面上に、中心を径8cm、深さ1.7cmの皿状に窪めて、後頭部を受けるようにし、その窪みを囲って、馬蹄形の両端を外方に反転させたいわゆる引手形の突帯を巡らせている。

棺身の縄掛突起は短側外方に1個ずつあり、太く短い式で、基部がくびれており、作りはあまり整正でない。現在、蓋部は折れて3片に分かれている。両端は北側と西側の縁部が多少損じている程度で、ほぼ原形を残しているが、中央の一片は両側縁の中ほどが損失している。幅は中央やや足よりのところが膨らんでいる。内面は身に応じた深い刳り込みがあり、同じく太くて短い、北端のものは損傷が著しい。

副葬品の出土状況

棺内には土砂が充満し、松の細根が蓋・身の合わせ目から侵入して内面全体に広がっていた。この土砂内にはガラスの鏡片、石油ランプのホヤ、茶碗片などが混在していたといわれるが、これらは明治20年頃の発掘に際して破棄せられたものではないかと報告者は見ている。当初の副葬品は棺内には一物も見いだすことができなかった。



第4图 快天山古墳第1号石棺实测图

棺外の遺物は、次のものが採取された。まず、棺身南の縄掛突起の西南隅辺りで、板石床面上に鏡が1面背面を上にしておかれ、その上に板石1枚を被せてあった。そのためか、鏡は小さく砕かれ、その3分の2が東の1段低いところにあり、他は西南のやや高い粘土間に挟まれていたという。またこの鏡に接していた粘土や石には朱の付着痕を認めたという。したがってこの鏡は棺内にあったものがここに移されたともみることができる。

また、北突起の西側では、槨壁と棺との間の土砂内より石釧の破片1個を見いだしたが、これも棺内から持ち出された可能性がある。

棺の東側では板石床面に鉄器類が並んでいた。棺身北端より60cm南に、扁平鉄斧が刃を棺と反対側に向けておかれ、その南30cmのところに鉄鏃群が一括してあり、さらに、その南15cmのところに有袋鉄斧が刃を東に向け、横にすぐ隣接する板石と板石の間にはまりこんでいた。棺の東南角に近いところでは、鉄短剣片が鋒を南にして、石槨床面から落ちて、棺身と床の石積みとの間の隙間の中ほどに落ち込んでいた。さらに発掘後ここから取り出された土塊の中から、管玉2個、鉄鏃2本、鉄刀子片4個などを大林氏が採取した。その他、勾玉1個、管玉2個、石釧1個が、棺身の東側の中央部辺りにあった粘土内より出たとあり、これらもまた、副葬品の取りこぼしであろうか。

棺身の西側では、板石床面より鉄器類が出た。棺身の西北隅近く、鉄鍬頭1個があり、それより60cm南に鉄剣1口があって、その上に板石を被せていた。さらに1m離れたところに鉈と鑿が1本ずつ、その南40cmのところには短剣1本が鋒を南に向けて棺身に接しておかれていた。

それ以外にも、2口分の鉄剣片が西側から出ている。

2. 第2主体

これは墳丘の主軸線に対して、第1主体と対称的に西方に営まれているが、現状は、逆にその西半部が破壊され、東側がよく残っているので、それから原形を復元することができる。それによると、細部に多少の相違はあるが、土壇内に石槨を築き、石槨を安置した構造は第1主体と同じである。

第1主体の土壇と第2主体の土壇との間は、約2mほどあって、現地地表下20cmのところに地山の上面が掘られないままに残り、そこには何らの設備もなかった。

土壇は、棺の東側における観察によれば、棺より1.4m離れて壇壁があり、現在破壊されている西側も同じ間隔があったと仮定すれば、棺幅を加えて、東西の幅は3.50m前後になる。また南の壇壁は石槨の南端から1m離れて検出され、北壁は確認されなかったけれども、同じ間隔をもっていたと見なせば、南北の長さは4.70m近くになる。

この土壇の床面は第1主体のごとく平直でなく、2段に掘り込まれている。すなわち、東側の断面で見ると、土壇の上口は地表下20cmにあり、そこから50cm垂直に下って第1段目の床面があり、壇壁の周縁から50cm中心へ入ったところで、第2段目の掘り込みがあり、その壁面は傾斜して30cm下り、最底面に達している。その中央辺りは多少下っていて、地表面から1.10mの深

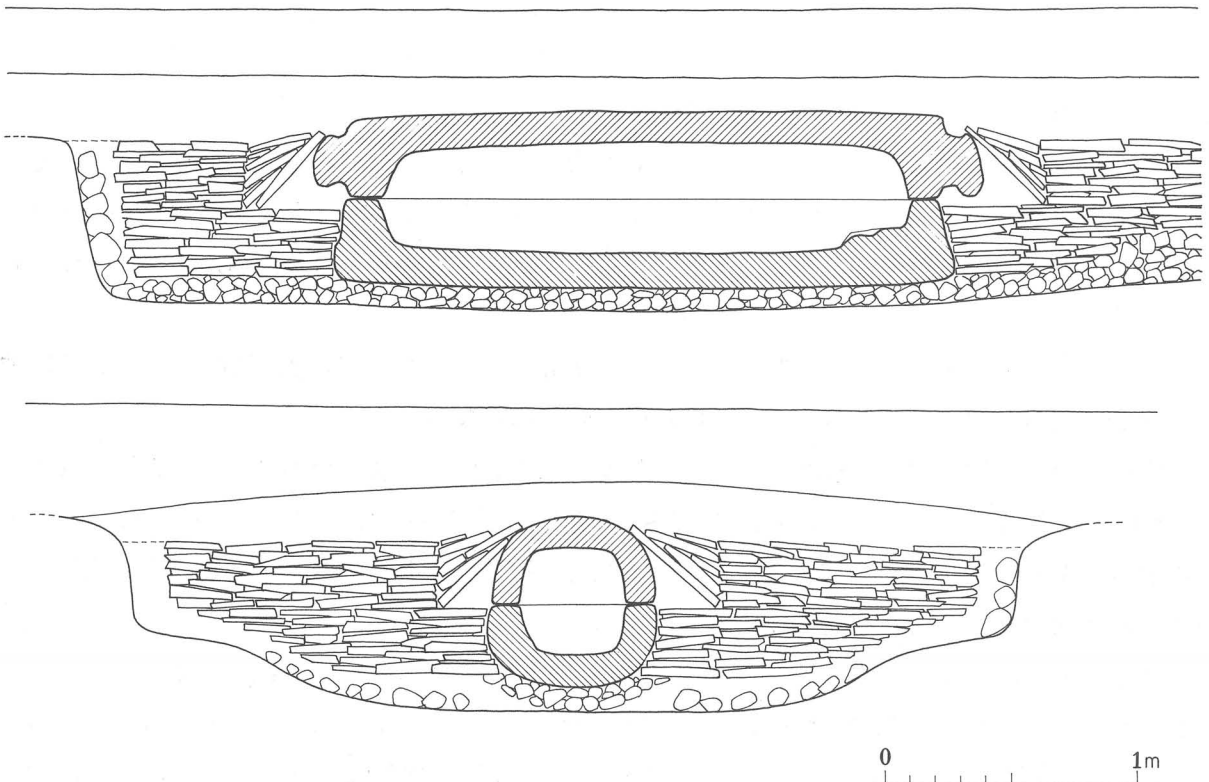
さがある。

この土壌壁面に粘土を1層貼っており、側壁面では厚さ10 cmほどであるが、棺身の下位では厚さ20 cmくらいになる。この粘土層と石槨の壁体との境目には、大型の栗石を並べており、棺は直接粘土面上に乗っているが、ただ棺底に接するところに、幅20 cm、厚さ10 cmの間に小型の礫を詰めた層が、断面に検出された。これは第1主体の場合と同様、棺下を縦に走っている排水溝と見ることができるかもしれない。

石槨は、また第1主体と同じ構造である。すなわち、槨室の床は棺身に密接して水平に積んだ板石からなり、その上面は棺身の上口よりわずかに低い所にあつて、その石積みの高さは約30 cmある。ただこの石積みと棺身の接着面には多少粘土を当てていたという。この板石床面の上には後述するごとく副葬品が置かれていた。

槨壁はこの板石床面の上に、棺から一定の間隔をおいて積み上げられたもので、東側においては現在、棺より1.30 m離れた辺りに壁体が残っており、その高さは20 cmほどあるが、内壁面は、板石に出入りがあつて、本来の垂直な内壁面がどこにあつたのかははっきりしない。棺と槨壁との間隔は第1主体の場合よりも広がつたのではないかと見られている。槨内の空間には同じ板石を充填しているが、それは棺蓋にもたせかけるように斜めにおいて、槨室の上面を被覆する板石敷きに続いてきたものと推測されている。

槨の壁体の全幅は1.3 mあるが、その下底は水平をなさず、土壌の床面が2段に掘り込まれているのに応じて外方は浅くなっている。

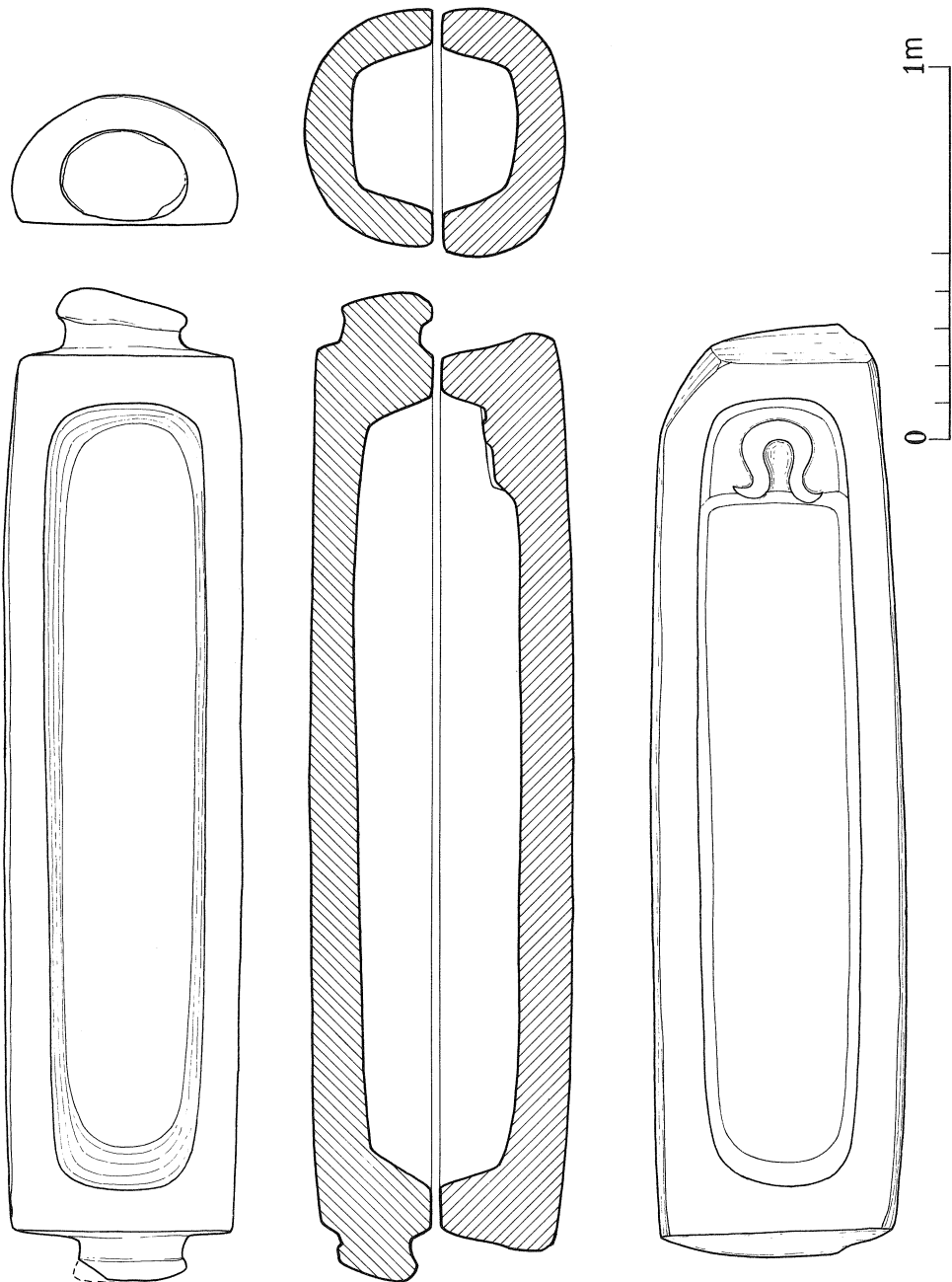


第5図 快天山古墳第2号石棺埋置想定復元図

石槨並びに石棺上方の被覆については、棺蓋頂面の表土は厚さ 18 cm あり、棺蓋の上には板石を不規則に積み掛けている様子が、第 1 主体の場合よりもよく残っていた。また、東側の壁体の上方では、厚さ 12 cm の粘土層と、さらにその上に厚さ 36 cm の表土層があった。したがって、石棺の上方に板石を斜めに積み上げた上、さらに粘土をまき、土を被せた様子が大体窺われるようである。

第 2 号石棺

第 2 主体の内部にあった石棺は、蓋が割竹形の典型をなしているが、身は中膨らみであるうえ



第 6 図 快天山古墳第 2 号石棺実測図

に、頭部の幅がかなり狭くなり、両端側は縄掛突起がなく、面は下に向って外方に張り出しており、断面もまた、上面よりやや下がった胴部が張り、扁平でむしろ舟形棺身の趣に近いといえる。北東角が大きく面取られていて、全体の作ゆきもそれほど整っていない。

内面の割り込みは整正で、第1号石棺と同じく、隅丸長方形にえぐってあり、周縁の幅は11 cmあり、北端下床に彫りだされた石枕も全く同じ形式である。内面には朱が一面に塗られていた。

蓋は今中央で2つに割れているが、整正に仕上げられており、両端についた縄掛突起は太く短く、その基部にくびれがあり、第1号石棺と同じである。ただ、北の突起は斜めに削られている。

規模は第1号石棺よりもやや小さい。角閃安山岩製である。

副葬品の出土状態

棺は蓋が2つに割れて、少し東にずれ、南端において、蓋と身の合わせ目に小石が挟んであったなどから推して、一度盗難に遭っていたようである。内部には土砂の流入は少ないが、水が充満しており、樹の細根が網を張りめぐらしていた。底部には朱が厚さ1 cmも堆積し、人骨は中ほどから北部にわたって残り、頭は枕部のところから床面に落ちて、横倒しになっており、胸部辺りに三角形の板石片が置かれていた。腕や足の位置は乱れているが、足は膝を多少曲げていた様子である。ただこれらの人骨は腐朽度がひどく、触れればぼろぼろに破壊してしまったという。採集せられた歯（下顎の門歯3、犬歯1、小臼歯1、大臼歯2、上顎の小臼歯1、大臼歯1）を大阪大学弓倉繁家教授の観察した結果では30歳代の女性とのことである。

副葬品として棺内には胸部横辺りから、内行花文鏡片2個、石枕の東よりで鉄刀子片2個が検出された。

棺外の遺物としては、西側において、中ほどからやや北寄りのところにあった粘土塊中より、管玉1個、鉄剣片3個が採集され、棺外東側でも、中央からやや南よりの粘土内から、鉄斧1個が刃を斜めに棺の方に向けて水平に置かれていたといい、また、南の縄掛突起付近から管玉1個も検出された。

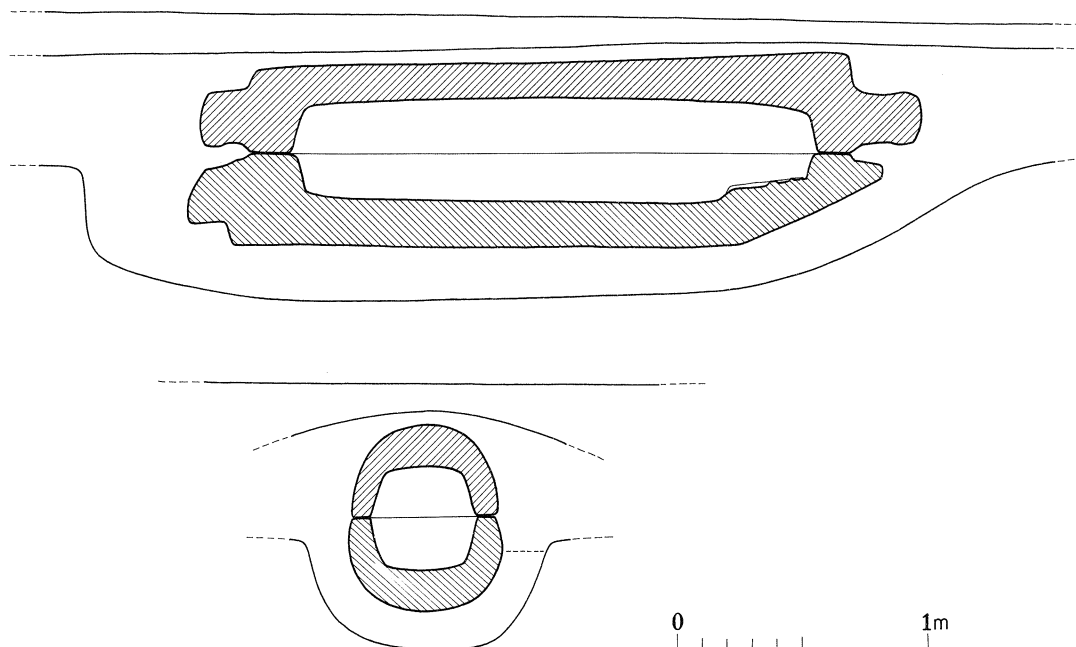
しかし、これらがもともと棺外の副葬品であったかどうかは疑わしいようである。

3. 第3主体

これは先の第1、第2主体と異なり、地山に掘り込んだ土壌内に、粘土槨で覆われた石棺を直接、安置した式である。

土壌は石棺の身を入れるだけの浅い長方形をしているが、東西の両長側壁は下に向って湾曲しており、南壁はほぼ垂直な壁面をなしているが、北側は壁面をなさず、石棺の北端下辺りから、土壌壁が次第に上昇して、地山の表面に達する斜面をなしている。これは石棺を壙内へ運び込むための通路とされたからであろうか。

壙の大きさは、東西両壁は棺身から15 cm（大林図では西40 cm、東30 cm）離れており、南面では、棺の南壁から20 cm（大林図では50 cm）離れているので、東西幅約100 cm（大林図では130 cm）、長さ34～35 cmくらいあったと見られる。土壌の深さは、棺身の上面より5～6 cm下がった



第7図 快天山古墳第3号石棺埋置状況図

ところに地山の上口面があるので、比較的浅く43 cmくらいだったと思われる。したがって、棺身の上面と棺蓋は土壌よりも上に、飛び出していたことになる。

この中に石棺を安置するに当たって、全面を粘土によって包んでいるが、これは营造の際には、棺身の下に敷いた下底部と、棺蓋の上覆部と分かれるようである。全体が同質の粘土を使っているため、両部の界線は明瞭ではないが、棺身の上面から約10 cm下がった辺りの粘土層内から、副葬の鉄槍が出土しており、それはちょうど、土壌の上面とほぼ同じ高さに当たっている。したがって、後述のごとき他の古墳の例と考え合わせてみると、両部に分かれて営まれたことが確かである。まず土壌底に粘土を厚さ20 cmに敷いて、その上に棺身を安置し、両側にも粘土を詰めた後、遺骸・副葬品の埋葬を行い、棺蓋で蓋をし、さらに全体を粘土で被覆し、盛り土を施したと見られる。

棺蓋上の覆土は現在、棺の南端辺りで厚さ20 cmあるが、北端部では5 cmしかない。これは北端部が後円部頂平坦面の端近くに当たるので、上部の被覆は多少削られたとしても、当初より浅かったと見ることができる。

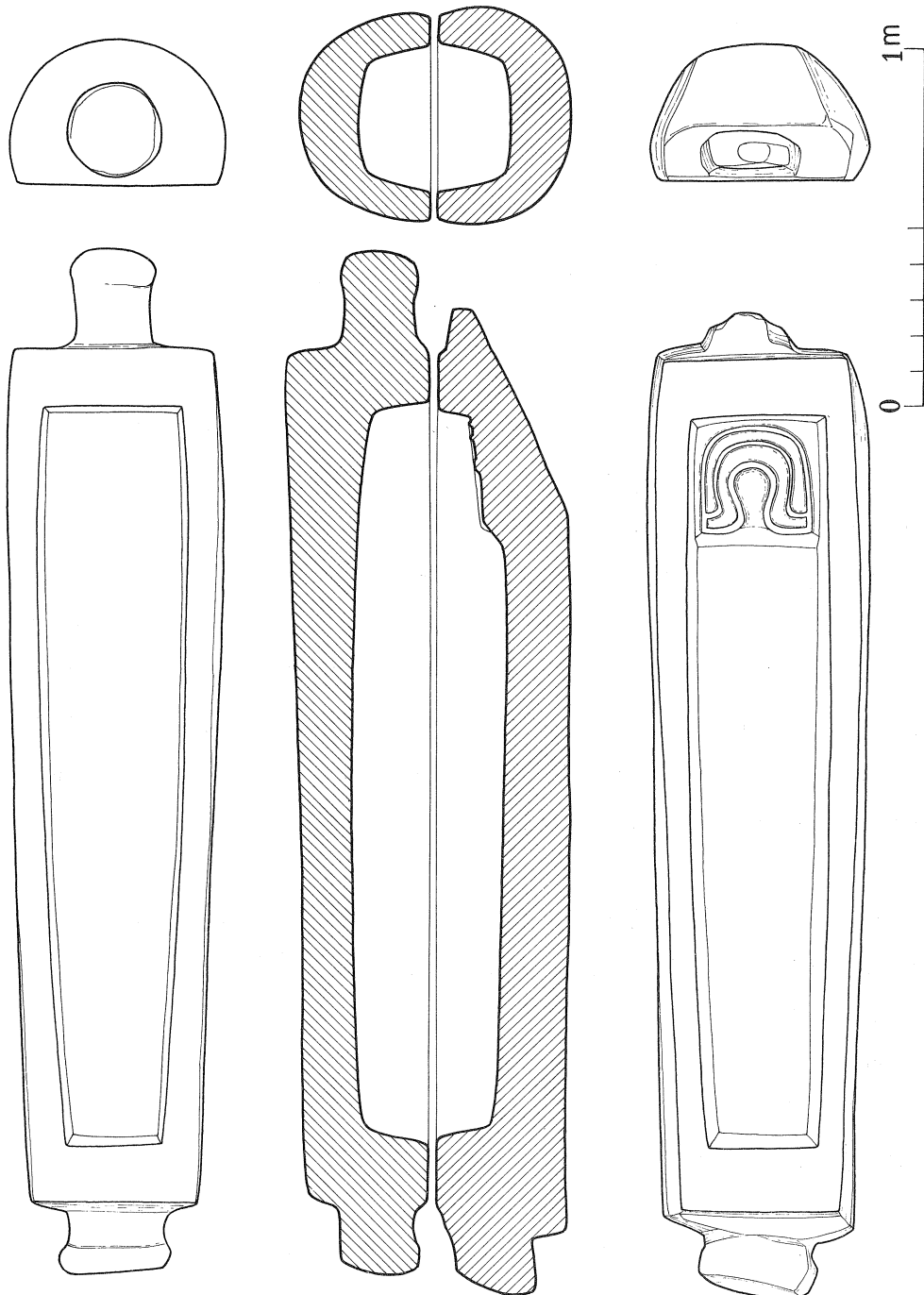
土壌の壁面に沿って、上方の堆積を検すると、両側地山の上面から上に、粘土層が厚さ32 cmあり、その上に表土が厚さ15 cmばかり認められる。この粘土層は、棺蓋の上を饅頭形に覆った上覆部の両端が垂直な断面に現れているのであろう。

第3号石棺

同じ石材を割り抜いて作った割竹形石棺であるが、やや小型であり、身部は多少舟形の趣をもっている。すなわち、上面から10 cm下がった中胴部がもっとも幅広く、底は平らに近いので、その断面は半円形というよりは、内湾式口の鉢形を呈しているといえる。しかも底面の

北端は斜めに削られて、船の艦底のような形をなしているので、北面側は高さが小さい。上面の幅は頭部が足部よりも大きい。両端の縄掛突起は同じく太く短い式で、基部にくびれがあることも、他の石棺と同じであるが、北突起は削られて小さくなっている。

外面の作りは粗いのに対し、内面の彫り込みは極めて整正で、四隅は丸みがなくて、角張っており、床面は足部が頭部よりも多少浅くなっている。上面の周縁は両側は7cmしかなく狭いが、南北端は18ないし15cmある。



第8図 快天山古墳第3号石棺実測図

頭部にある石枕は同じく北端より 35 cm の間を 1 段高くして、その上に彫りだされているが、中央の皿状の窪みを囲む引手形の突帯は、その内外両縁に細かい突帯を残して、その間を七面状に凹ませており、さらにその外側にもう 1 本の細突帯を巡らし、引手形の両端をそれに密着させているので、先の 2 棺の石枕よりやや複雑である。

棺蓋は今 4 ヶ所で割れ、5 片に分かれているが、作りは整正である。頭部が足部に比して幅も広く、高さも大きいのが、内面の彫り込みはかえって頭部の方が浅い。断面では下面よりも、12.3 cm の中胴部がもっとも膨らみをもっていること、身の場合と同様である。彫り込みの周縁は棺身と同じである。

縄掛突起は南のものは同じく太く短い式であるが、北のものはやや幅が狭く、長く飛び出している。

内面には朱が一面に塗ってあった。

遺物出土状態

棺内には多量の朱が遺存していた。人骨は 1 体分が伸展葬され、頭骨は石枕からずり落ちて、棺の内底肩の辺りにあったという。第 2 号石棺内の人骨と同様、弓倉博士の歯牙による鑑定では、30 歳前後の男子とのことである。

棺内の副葬品としては、鏡が 1 面、石枕のある台状の東北隅に鏡背を上にしておかれ、さらに鉄短剣 1 本分の破片が石枕付近に散らばっていた。すなわち、柄と刃元部は石枕の南下方の床面にあり、それに続く刃身部片が石枕の東側に、その他の破片が西側から北端部にかけて並んでいた。

棺外の副葬品としては、南の縄掛突起の西側 6 cm のところ、表土から 39 cm の深さに、土師器壺 1 個が上向きにおかれていた。

そのほか棺の東側で、棺身東南隅より、55 cm 北、20 cm 東に離れたところで、棺身の上面より 10 cm 低い深位から、鉄槍身 1 本、鉄鎌 1 個が出土した。刃を棺側に向け、先端を北にして置かれていたという。

また、同じ棺の東側中央辺りから掘り上げられた土の中より、鉄鏃 1 本、鏡片 1 個が出土したという。ただし、『県報告書』にはこの鏡の記述はない。

以上の後円部に見られた主体構造のほかに、前方部にも別の埋葬が行われたことは既述した通りであるが、昭和 13 年前方部先端付近を開墾したとき、4 基の組合せ式石棺が発見せられたという。そのうち大きな組合せ式石棺内から、小型の珠文鏡（径約 5 cm）が出、もと、同村小学校に保管されていたが、今その所在を失っている。『県報告書』には、その拓影（第 4 図）を載せ、『栗熊村誌』を引いて、昭和 13 年 1 月 21 日、快天山の山頂北約 1 町の南斜面の古墳から出たと記している。

第4章 遺 物

本古墳出土の遺物は、何回かの発掘に際して、それぞれ検出され、その大部分については、すでに『県報告書』に解説されている。しかし、それ以外の遺物もあり、また解釈に多少相違も認められる。

まず品目を表示すると次のごとくになる。

第2表 快天山古墳出土遺物品目

	第1主体		第2主体		第3主体		その他
	棺内	棺外	棺内	棺外	棺内	棺外	
A. 装身具							
鏡		1	1		1	破片 1	{ 管玉 1、小玉 1 (第1号石棺外出土) 鎌田共済会
管玉		3		2			
勾玉		1					
石釧		2					
B. 武器							
鉄矛						1	
鉄剣		4		3	1		
鉄刀		破片 3					
鉄鏃		20					
C. 農工具							
鉄刀子		3	2				
鉄鑿		2					
鉄斧		2		1			
鉄鉈		1					
鉄鍬		1					
鉄鎌		1				1	
D. 土製品							
土師壺						1	

1. 装身具

《鏡》

獣文縁方格規矩四神鏡 第1号石棺出土

細かく碎けているが、接合すると、内区の約4分の1を欠く程度で、大体の鏡式を推することができる。径18.5cm。反りはかなりある。全体に錆化が進んでいて、曇蝦斑が認められるが、漆黒色を呈した良質の白銅鏡である。背面の文様は鈕を囲む方格内に、円圈小乳と交互に十二支の文

字を配置しているが、その書体はゴシック体に近く、通有の例とやや趣が異なる。方格と鈕との間の四隅に「長宜子孫」の銘が1字ずつ置かれている。TLVの間に配せられた図像は、四神の内、朱鳥2羽と青龍1とが認められ、他の2神霊は欠けているが、朱鳥と青龍との間には、腰を曲げた怪人の像がある。これは他の四神鏡においても必ず青龍と隣接して配されているので參龍氏を描いたものであろうか。ただこの鏡の図文は細線ではなく、画像鏡的な趣のある表情が特徴である。

外区の平縁は比較的幅が狭く、圈帯に鳥獸を継ぎ文として巡らしている。

鈕孔の上辺や図文には手馴れの痕が認められる。中国後漢盛期の作である。

内行花文鏡片 第2号石棺内出土

今、内行花文2個分が残っているだけであるが、復元すると六花文鏡になるようである。黄緑色の銅質、薄手の作りである。

背文は、円座鈕の周りに、櫛目文帯と素文の突帯があり、次の内行花文帯では、内行花文間の空所に、細線で四重山形文を入れている。内行花文帯の外に、今一つの櫛目文帯がある。平素縁部は欠けてしまっているが、推定径12cm内外のものであったと見られる。仿製。

内行花文鏡 第3号石棺内出土

完形品で、径9cm、反りの強い薄手の鏡、鉛黒色をした仿製鏡である。背文は円鈕をめぐって、二重に細線圏があり、その外の6個の花文の間には、3珠文を配し、それをめぐる櫛目文帯があつて、素縁に続くが、縁と内区を区切る段は低い。

鏡片 1 第3号石棺外出土

素縁の一部で、内側に櫛目文帯のあつたことが知られる。断面形や銅質の特徴から見て仿製で、先の例と同じ内行花文鏡ではないかと思われる。径は復元してみると12cmあり、あるいは第2号石棺内から出土した鏡の縁部に当たるかもしれない。

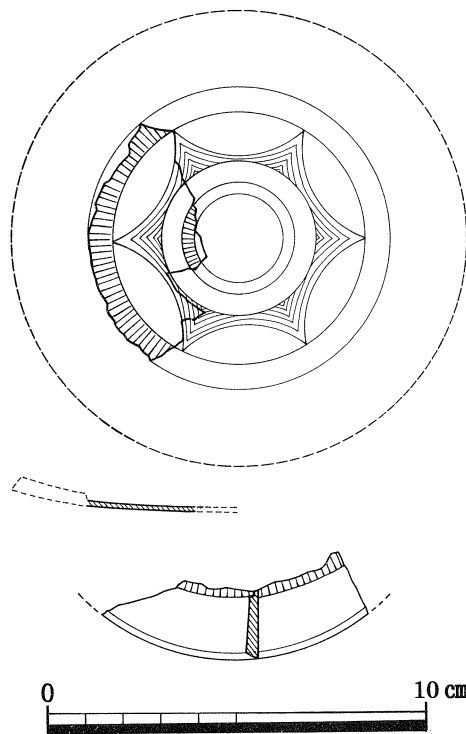
珠文鏡

現存しないが、昭和13年1月21日に前方丘にあつた組合せ式石棺の中から出土したという鏡について、拓本1枚が残っている。径5cm内外の小鏡で、その4分の1を残しているが、背文は、幅の狭い素文縁の次に鋸歯文帯と櫛目文帯があつて、内区には多くの珠文が認められる。「栗熊村誌」には質は白銅で、鈕孔に麻紐が付着していたと記してある。

《玉類》

勾玉 1個 第1号石棺外出土

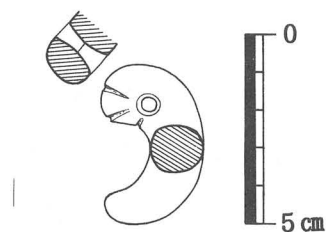
半透明に近い、緑色の美しい色澤をした硬玉製である。片面の頭部に近いところに小さい亀裂



第9図 快天山古墳出土銅鏡実測図
(上 第2号石棺内出土、
下 第3号石棺外出土)

があり、同じ面の尾部に近いところに疵痕があるが、頭部から尾部に向って徐々に細くなり、整った半弧形をしている。

長さ 2.1 cm、厚さ 0.65 cm、やや太い頭には、孔に向って 3 本の刻線があり、いわゆる丁子頭をなしている。孔は両側から穿ち、内部の孔径が両端よりも小さくなっている。頭の刻線や孔の所に朱が付着している。



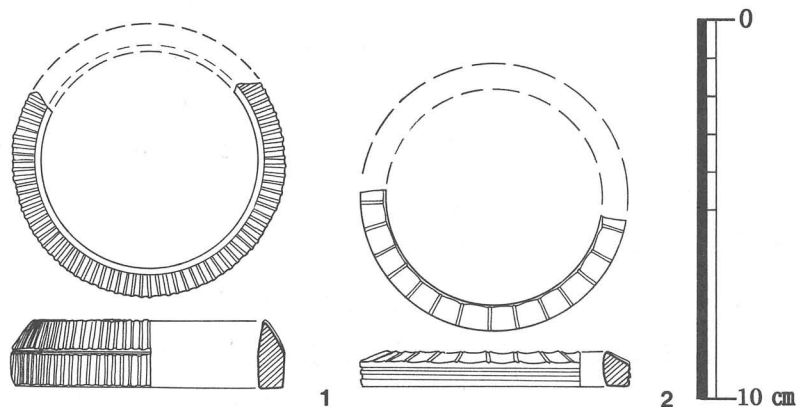
第 10 図 快天山古墳第 1 号石棺出土の勾玉

- 管玉 3 個 第 1 号石棺外出土
 1 個 第 1 号石棺外出土 (鎌田共済会蔵)
 2 個 第 2 号石棺外出土
- 小玉 1 個 第 1 号石棺外出土 (鎌田共済会蔵)
- 石釧 2 個 第 1 号石棺外出土 (県立図書館蔵)

棺外東側に遺棄せられていた粘土塊内より出土したものは、2 片を存しているが、接合すると、円形の環体の 3 分の 2 を残している。全面風化が著しく、緑灰色を呈した碧玉製である。外形 7.5 cm、内径 6 cm、高さは内縁で 1.65 cm を測り、体幅は 0.8 cm ある。外側は傾斜の強い上半部と、垂直な下半部からなり、それぞれを厳密に配列した刻線で飾り、その両面の界には沈線 1 本が水平に走っている。内側の垂直面と下面は、やや膨らみをもった素面である。

第 2 の石釧は棺の北端、縄掛突起の西側から出土したもので、器身のほぼ半ばを遺存している。濃緑色をした光滑度の高い碧玉製品である。円形の環体は外形 7 cm、内径 5.6 cm、厚さは内縁で 1 cm、外縁で 0.8 cm を測る。

また体幅はこの上面で 0.8 cm、下面で 0.6 cm ある。上方の傾斜面には内縁のところから 0.6 ~ 0.8 cm の間隔に刻線 1 本ずつが放射状に刻まれ、その線と線との間は七面状にえぐってある。外側面には、2 本の沈線が平行に走り、内側と下面は素面のままである。

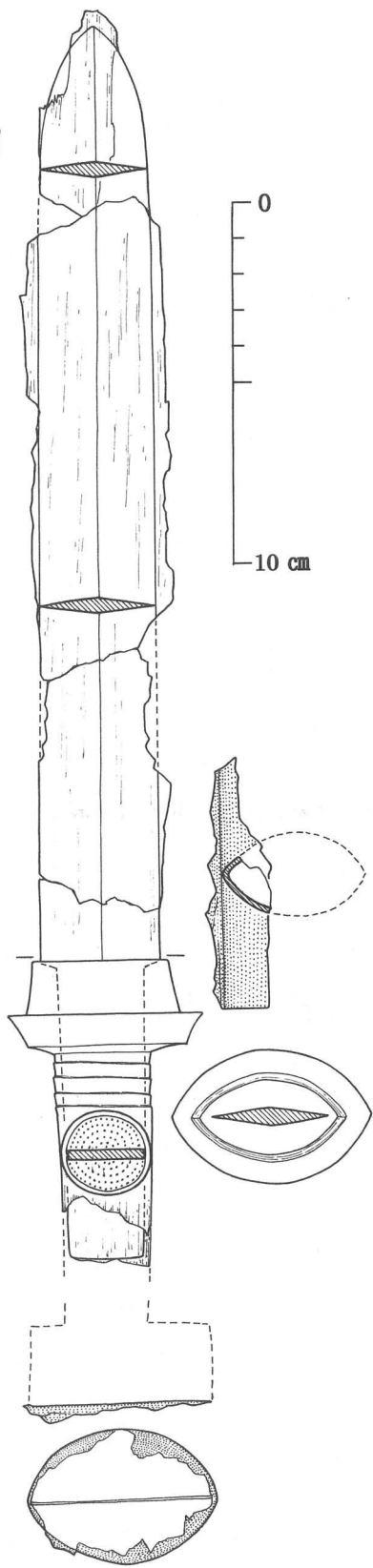


第 11 図 快天山古墳第 1 号石棺出土の石釧

2. 武器

- 鉄刀 4 振 第 1 号石棺出土
- 鉄剣 5 本 第 1 号石棺出土
 3 本 第 2 号石棺出土
- 鉄剣 (槍?) 1 本 第 3 号石棺内出土

4 片に折れているが接合すると全体が残っている。全長 34.5 cm。剣身は鋒から茎木までの長さ



第12図 快天山古墳第3号石棺内出土の鉄剣

26 cm、幅 3.3 cm あるが、厚さは極めて薄く、中央の鑄のところ
で 0.6 cm しかない。全体に木質が付着し、また別に木鞘の断片
が残っている。それは断面が杏仁形をなし、その上を布で厚く
巻いた様子が残っている。

茎は幅 2.2 cm、厚さ 0.3 cm あり、長さは関部に鑿があつては
っきりしないが、その鑿端から茎尻まで 5.7 cm あり、直に切ら
れている。目釘孔の存在は柄木の付着ではっきりしない。

柄は断面が円形に近く、その長径 2.5 cm、短径 2.4 cm あり、
木質の上を、幅 0.4 cm の平紐でコイル巻きにし、その上に漆を
塗っている。この拵えは剣とするよりはむしろ槍とすべきもの
であろうか。別に鞘尻らしきものがある。

鉄矛身 1 第3号石棺外出土

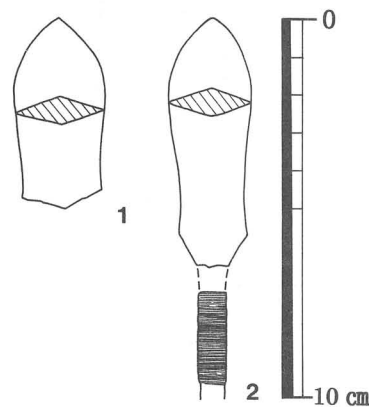
尖端が欠けているが、現長 18.7 cm あり、身の断面は不整形
をなし、基部では袋になって、柄を挿入するようになっている。
その端径は 3 cm、内部は 2.5 cm まで中空であるが、その先
は詰まっている。

鉄鏃

第1号石棺出土のうち3個は、有茎柳葉型式である。もっと
もよく残ったものは長さ 6.6 cm、幅 2.2 cm あり、断面扇菱形を
呈し、鑄がある。茎は欠けているが、折れた破片によると、竹
の篋に樹皮を被せ、その上に葛巻きした後、黒漆を塗っている。

他は有茎腸挟柳葉型式で、復元すると、長さ 5.6 cm、幅 2.5
cm くらいある。

第3号石棺出土の1例は、平根腸挟有茎式である。尖端や逆



第13図 快天山古墳第1号石棺外出土の鉄鏃

刺の部分、茎などを欠いているが、身長8 cm、中央幅3.5 cm、厚さ0.5 cmの大型扁平なものである。

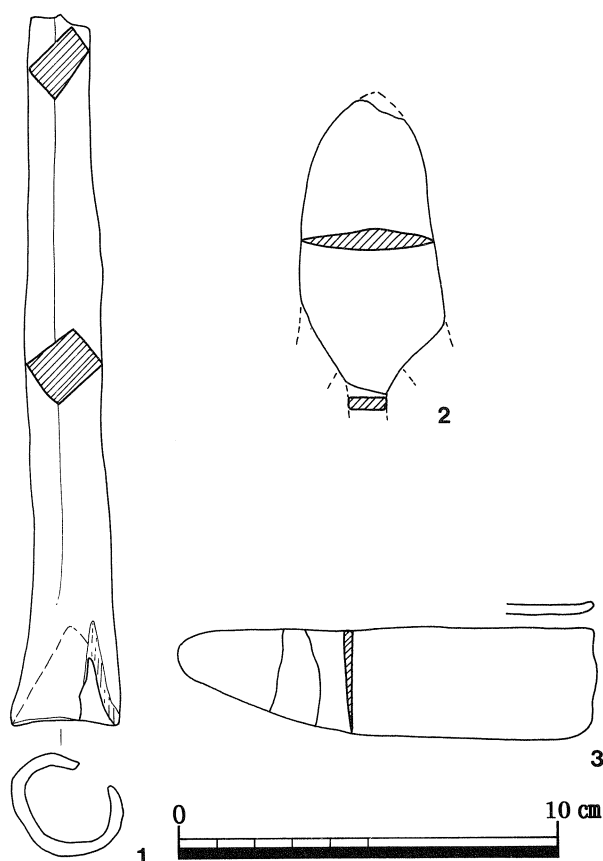
3. 農工具

鉄斧 3

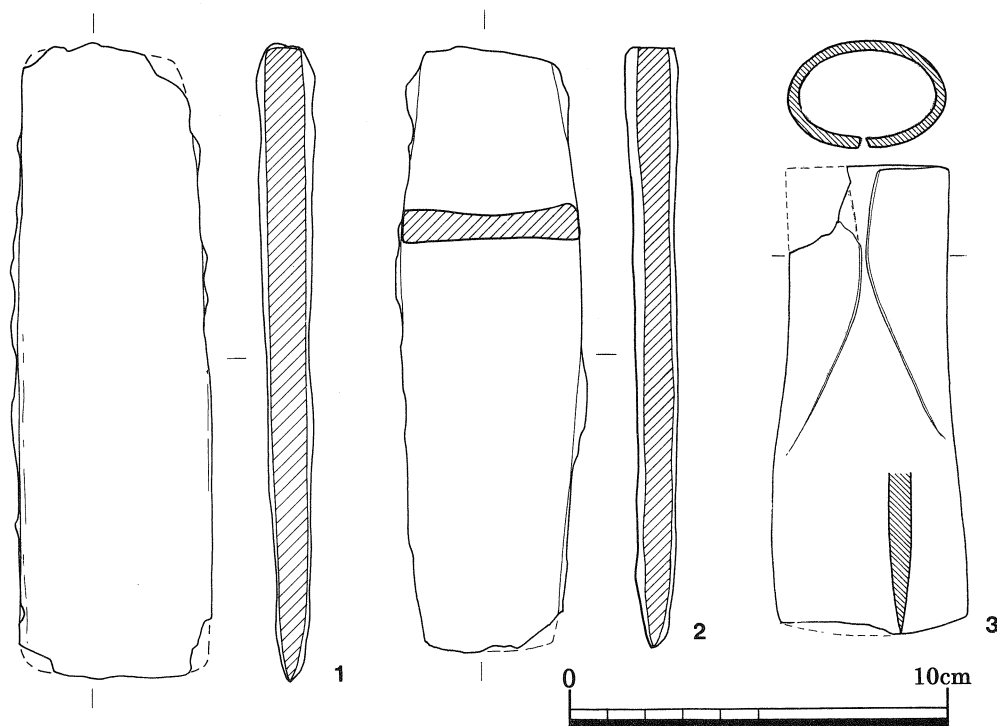
うち2個は扁平型鉄斧である。長方形の鉄板の一端を凸刃、他端を直脊としたもので、第1号石棺外出土品は長さ16.6 cm、幅5 cm、厚さ0.7 cmを測る。

第2号石棺外出土品は長さ15.8 cm、幅は中央が膨らんで4.6 cmあり、刃部と脊部は多少狭い。横断面において、両側縁がやや厚く、中央部が表裏両面ともわずかにへこんでいる。

他の1個は第1号石棺外出土の有袋式で、袋部と刃部との界をなす両肩がなく、両側は直線状に続いている。長手でやや薄い作りである。袋部は鉄板の両側を折り曲げて、



第14図 快天山古墳第3号石棺外出土の鉄器類 (鉄矛・鉄鏃・鉄鎌)



第15図 快天山古墳第1・2号石棺外出土の鉄斧

上で合せており、その長径は 4.2 cm ある。
全長 12.5 cm、刃幅 5.1 cm。

鉄鋤 1 第 1 号石棺外出土

ぼろぼろに碎けているが、横長の長方形の鉄板の両端を折り曲げて木柄を挿入するように作り、広い一端を刃にしたもののようなものである。

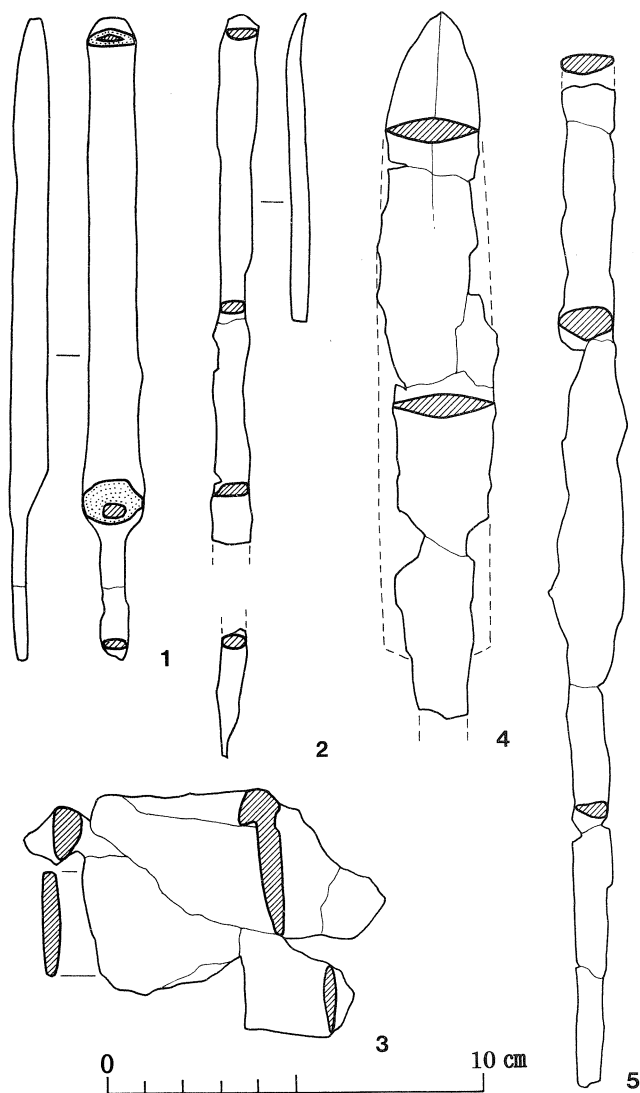
鉄鎌 1 第 3 号石棺外出土

鉄鉈 1 第 1 号石棺外出土

鉄鑿 1 第 1 号石棺外出土

鉄刀子 3 第 1 号石棺外出土

2 第 1 号石棺内出土



第 16 図 快天山古墳第 1 号石棺外出土の鉄器類

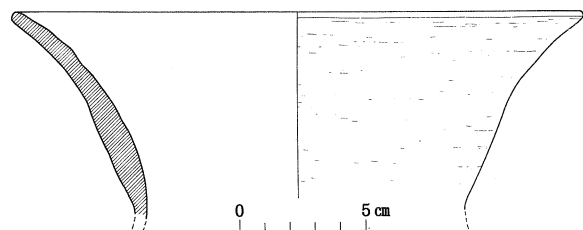
4. 土製品

土師壺 1 第 3 号石棺外出土

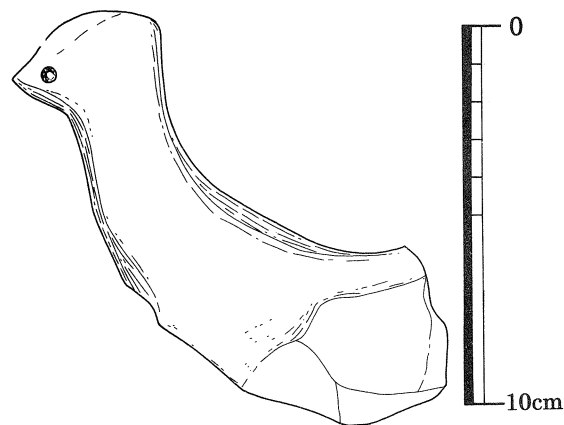
胴部が細かく壊れてしまっており、口頸部のみが復元できる。広口の丸底壺で、口径 22.8 cm、頸高 9 cm 内外である。黄褐色をした泥質で、外面は平滑に仕上げているが、内面は凹凸があり、厚さ不定である。表面摩滅して、刷毛目ははっきりしない。焼成は比較的良好である。

埴輪

採集せられた埴輪は破片のみであるが、円筒が大部であって、そのうち大きさの知れるものによると、底径 33 cm 大のものと、30 cm 前後のもの 2 種があり、前者は厚さ 1.5 cm、後者は 1.3 cm ぐらいである。この



第 17 図 快天山古墳第 3 号石棺外出土の土師器



第 18 図 快天山古墳出土の鳥形埴輪

ほかに朝顔形埴輪も存在したと『県報告書』には記してあるが、詳細は不明である。

鳥形埴輪

昭和25年10月13日に宇多津中学校の生徒が、後円部東側の基部に近い小径付近で拾得したものである。全長13.5cmの小型品で、簡単な作りではあるが、まっすぐに伸びた頸に丸い顔が付き、嘴は短く、沈線で丸い眼を表している。脚部は径2.8cmの円棒状をなし、今基部で折れている。これは独立した彫像ではなく、もと、大型の埴輪に飾りとして付着していたもののようである。京都府与謝郡作り山古墳や、岡山県金蔵山古墳、三重県石山古墳などから類品が出てくる。

参考文献

梅原末治『古式古墳観』大和文化叢書 昭和36年

註

- 1) 和田正夫「快天山古墳の発掘調査」(香川県教育委員会月報二の十 昭和25年10月)
同文の記事が香川県立三本松高等学校考古学部発行の全国高・中学校考古学連盟の機関誌『Archaeology』第2号 昭和36年3月刊にも載っている。
- 2) 和田正夫・松浦正一『快天山古墳発掘調査報告書』(香川県史蹟名勝天然記念物調査報告書第15 昭和26年)
- 3) 朝倉書店発行『日本地名事典』第3巻 昭和30年
- 4) 南塔 阿闍梨快山 正徳二年三月(1712年)
北塔 法印 快天 寛保元年六月(1741年)
中塔 法印 宥雅 寛政十一年十一月(1799年)
- 5) 註2) 文献第1図によれば、-12mの等高線の辺りに、後円部後方の葺石と埴輪の位置が示されている。
- 6) 露出していた本石棺の蓋の傍らにある無縫塔列の近くに、檣壁に使用されていたと思われる板状の安山岩や河原石が積まれており、また同じ石材が、快天墓の台石の下にも敷かれているので、内部主体の乱掘は、少なくともこの無縫塔建立以前になされたと『県報告書』は見ている。もっとも第1号石棺発掘の際に、石槨西壁の上部に位置していた快天墓を除いたが、その下には快天墓の地下構造はなく、すぐに第1号主体檣壁の上部にぶつかったという。
また、第1号石棺は明治20年頃開いたことがあると、土地の人が伝えているが、今回の発掘に際して、棺内から当時の遺品とおぼしきガラス製の鏡やランプのホヤ、茶碗の破片などを取りだしており、地元の言い伝えを実証している。
また、坂出市の鎌田共済会に快天山古墳出土の管玉・小玉の類が保管されており、それらは後円部後方が開墾せられた昭和7、8年頃、石棺発掘の際に出土したものとされている。

付章 1 快天山古墳測量調査略報

徳島文理大学 大久保 徹 也

1. 2001 年度の墳丘測量調査

これまで快天山古墳の詳細な墳丘測量図が作成されていなかったため¹⁾、今回の報告書作成を契機に、綾歌町教育委員会では今後の快天山古墳保存活用方針を検討する基礎資料として、快天山古墳墳丘および周辺地形の測量図作成を計画した。

測量調査は徳島文理大学文学部講師大久保徹也を担当者として 2001 年 4 月～5 月にのべ 15 日間をかけて実施し、同文化財学科学生その他、徳島大学総合科学部考古学専攻学生、九州大学考古学研究室学生、天理大学考古学研究室学生の参加を得た。快天山古墳墳丘および同古墳の規模・形態の検討に不可欠な周辺地形を可能な限り把握することを意図して、同古墳の立地する丘陵先端部の南北約 160 m、東西 100 m の範囲を対象に平板測量で縮尺 1/100、25 cm 等高線図を作成した。

測量調査にあたり、石野博信、置田雅昭、岸本道昭、信里芳紀、乗松真也、古瀬清秀、北條芳隆、松本敏三、松本和彦の各氏には様々ご教示を頂いた。付記して感謝したい。

2. 快天山古墳の墳形に関する既往の理解

比較的早くから、快天山古墳を前方後円墳とする見解が示されてきたが、一方では根強く大形円墳の可能性も示唆されてきた。1970 年代の大規模農地開発事業で前方部が切断された事態は、こうした従来の墳形理解の曖昧さと無関係ではないだろう。

1951 年に刊行された県の調査報告²⁾では、相当の躊躇を交えながらも、快天山古墳を積極的に前方後円墳と捉え、その観点から規模・形状の観察を試みている。この調査報告に先立つ 1935 年の寺田貞次「讃岐に於ける前方後円墳」³⁾では讃岐地域の前方後円墳・双方中円墳計 21 基と「前方後円墳と思考されるもの」40 基を集成し、規模・立地・埴輪の有無・埋葬施設・副葬品など諸要素の概括的紹介を試みている。この中で、快天山古墳は「前方後円墳と思考されるもの」として紹介する。また栗熊史談（1938 年）では快天山古墳を「円墳（一説には前方後円墳ともいう）」と記述する⁴⁾。このような快天山古墳の墳形理解の曖昧さは、何と云っても本墳に限らず四国北東部地域の前期前方後円墳の立地及び形態上の特性に由来する部分が大いと思われる。平野に突出する眺望の秀でた丘陵先端を選び、後円部を先端側に設け、前方部を丘陵基部に向ける立地原則と、さらに後円部墳丘に比べ著しく立体感を欠く低平な前方部の付設という形態上の特性がそれである。また 1950 年の調査時にすでに前方部北半が畑地に開墾され、ある程度は原形を損なっていたことも墳丘理解の曖昧さを助長するものとなったといえよう。

前述の県報告では、後円部は尾根先端部を利用し、円錐形に加工された円丘部分が明確であるとして、さらに北に連続する尾根線部分の形状や、葺石、埴輪の散乱範囲を根拠に前方後円墳の

可能性を指摘している。また後円部中心より北 62 m 付近で尾根を東西に横断する里道付近を、前方部前端と推定している。以上の理解に基づいて快天山古墳の規模を次のように復元した。

墳長 約 100 m

後円部基底直径 約 65 m

後円部高さ 約 8 m

頂上平坦面 東西 13 m 余、南北 16 m 余の楕円形

後円部と前方部の比高 約 2 m

しかし同時に、前方部前端が明瞭でないこと、更に推定前方部前端付近で開墾時に 4 基の箱式石棺が発見されていることから、この部分に別の小規模墳を想定しうる可能性を挙げて前方後円墳と捉えることに対する躊躇もまた示している。なお前方部前端推定位置付近に別個の墳丘を想定する見解は上述の栗熊史談でもすでに示されている⁵⁾。

3. 快天山古墳の墳丘形態と規模

今回の測量調査の結果、とくに、両側のくびれ部を明瞭に捉えることができた点で、快天山古墳が前方後円形を呈することに全く疑問の余地はなくなったと考えるが、なお前方部前端ラインをはじめ、各部の詳細な規模・形状については確定しがたい部分が残し、今後の確認調査に結論を委ねる部分も大きい。以下、測量調査所見から推測しうる範囲で快天山古墳の規模・形状について簡単に報告する。

《立地》

横山山塊から南に派生する丘陵群の南西隅に位置する一支丘先端部を利用し、後円部頂は標高 75.3 m を測り、南方平野部との比高はおおよそ 40 m となる。墳丘主軸は N 20° E となる。後円部を南（丘陵先端）に、前方部を北（丘陵基部）に向ける。地形的にみて、丘陵基部に十分な余地が存在するにも関わらず、後円部を“無理に”丘陵先端部斜面にせり出すように設けており、その結果後述のとおり、後円部南端と前方部先端付近とは墳丘基底レベルに数 m 以上の比高差が生じている。このような占地上の特性は本地域では前期を通して相当に普遍的に見出されるもので、快天山古墳の位置づけを評価する上で留意しなければならない点の 1 つである。

《現況》

丘陵裾部では宅地化が進みつつあるが、南・西面ではまだ相当の間隙があり、本墳の地形条件などの理解を妨げるほどではない。ただし東面では間近に鶏舎などが設置され、それによってくびれ部よりの後円部裾が一部損なわれている。後円部から前方部南半部に至る部分は現在、櫟ほかの疎林に覆われ比較的旧状をとどめる部分であるが、後円部の東～南斜面一帯は 1930 年代の開墾時に形作られた畝が墳頂部まで並ぶ。更に東面では墳丘裾部が削り込まれ 1 m 内外の崖状を呈する。くびれ部西面も以前開墾され、その折に取りのけられた葺石が集積された箇所も見られるが、墳丘そのものの極端な改変は窺えない。同東面は上述のとおり、鶏舎が迫るが墳丘部分は、旧状をとどめているように見える。

これに対して前方部北半部分は、1950年調査段階ですでに畑地化していたようであるが、更に、先述の1970年代の大規模農地開発によって残念ながら相当の改変を蒙っている。後円部中心点の北34mの地点で、東から延びる幅7mほどの農道が尾根を横切り墳丘を完全に切断している。農道はこの部分で屈曲し、前方部北半推定部分の西面を削り込みながら北に延びている。さらに農道西側では南北20m以上の範囲が投棄された建設残土に分厚く覆われ、この部分の形状観察が不可能となっている。丘陵東面は鶏舎と農道の設置で刻まれ、前方部東裾推定部分を相当に損なっている。尾根稜線部もこの時期にあらためて手を加えられたらしく、前回調査で前方部前端を反映するとされた里道は現存していない。しかし現状でも後円部頂とこの部分の比高は2m前後を測り、前回報告時のデータと異ならないので大幅な削平は蒙っていないと考えられる。なお墳丘外方ではあるが、後円部中心点から北約90m以北では連続する尾根そのものが大きく削平されており、全体的な地形的関連が現状では判りづらい。

《規模》

東～南斜面一帯の開墾によって多少、縁辺の形状が損なわれているとみられるが、後円部頂は南北17m、東西13～15mの小判形を呈する平坦面を認める。前回調査で検出ののち再埋置された3基の割竹形刳抜石棺は平坦面中心を避けるように、中央の東西と、中軸線よりやや西に偏したくびれ部よりの位置に現在も蓋頂部を露出させた状態で見出すことができる⁶⁾。

後円部東面から南面にかけての裾部では、標高65～65.5mあたりに微妙な傾斜変換点を見出すことができる。この部分は上述のとおり開墾時の改変を蒙っており、その点で墳端と断定することには不安が残るが、周囲の地形状況から、大きく違えることはないと思われる。この位置は、東面では後円部中心点から33m、南面では37mの位置になる。西面は墳丘が部分的に崩壊しており、明示しがたいが、単純に東面の所見を折り返せば横断径66mというデータが目安として得られるだろう。この数値は前回調査の後円径推測値とほぼ一致する。また墳頂平坦面の形状と対応して、後円部そのものも主軸（南北）方向にやや長い楕円形を呈するものと推測できる。なお、後円部の高さは南面の頂端推定位置から測って10m強となる⁷⁾。

農道切断部以南の前方部上面は、後円部頂より約3mほど低いレベルで、くびれ部に向かって徐々に広がる幅6～8m程度のやや広い平坦面となる。両者は緩やかなスロープで連結される。また前面に向かって、地勢に応ずるようにわずかに高まる。くびれ部～前方部南半の墳丘側面では東面がよく旧状をとどめるが、この部分では標高67m付近と68.5m付近の二段に微妙な傾斜変換点を見出すことができる。ともに墳丘主軸とほぼ並行するものである。後円部東面との連続に留意すれば、現時点では下位の67m付近の変換点を墳端ラインと捉えておきたい。墳丘主軸から約19mとなる。西面では変換点を確認することは困難であるが、単純にこの所見を折り返せば38mという数値が目安として得られる。これにしたがえばくびれ部は、やや幅広い形状となるだろう。また後円部南半に比べ、前方部中程で墳端レベルが2mほど高くなることに注意しておきたい。

農道切断部以北では現状の地表面観察から、本来的な前方部形状と規模を復元することは非常

に困難であるが、地形などからいくつかの推測材料を挙げることは可能である。北に連続する尾根線は後円部中心点より北 80 m、標高 75 m 付近を分岐点として東南東方向になだらかな支丘を派生させている。先に推測した前方部南半の東面墳端をそのまま北に延長すればこの支丘側面に当たるが、この部分に人為的な地形改変の痕跡は認めることができない。一方、丘陵西面は対応する辺りでやや挟り込まれ、かなり急傾斜な地形を呈している。したがってこの部分まで前方部の延長を想定することは難しく、前端は、これよりも南に位置すると考えるべきである。現存しないものの、前回調査で前方部前端を反映すると推測された里道を、今回作成した測量図に当てはめると、おおよそ今述べた東支丘派生部分の南縁（後円部中心点より北約 62 m）に復元できる。また、これよりも南よりの部分で墳端を推測する材料は得られない。積極的な根拠は提出できないものの、周辺地形を考慮すれば、1951 年調査の推定は妥当な内容といえるであろう。

これに従えば快天山古墳の墳丘主軸長は 99 m と推定される。また前方部長はおおよそ 40～42 m で、前方部前端幅については現時点では推測困難である。以上、今回測量調査所見に基づく墳丘各部推定値をまとめると次のようになる。

墳 長	99 m
後円部径	(東西) 66 m
後円部高	10 m (南面から計測)
前方部長	40～42 m
前方部高	5.5 m (中位部)
前後比高	約 2 m

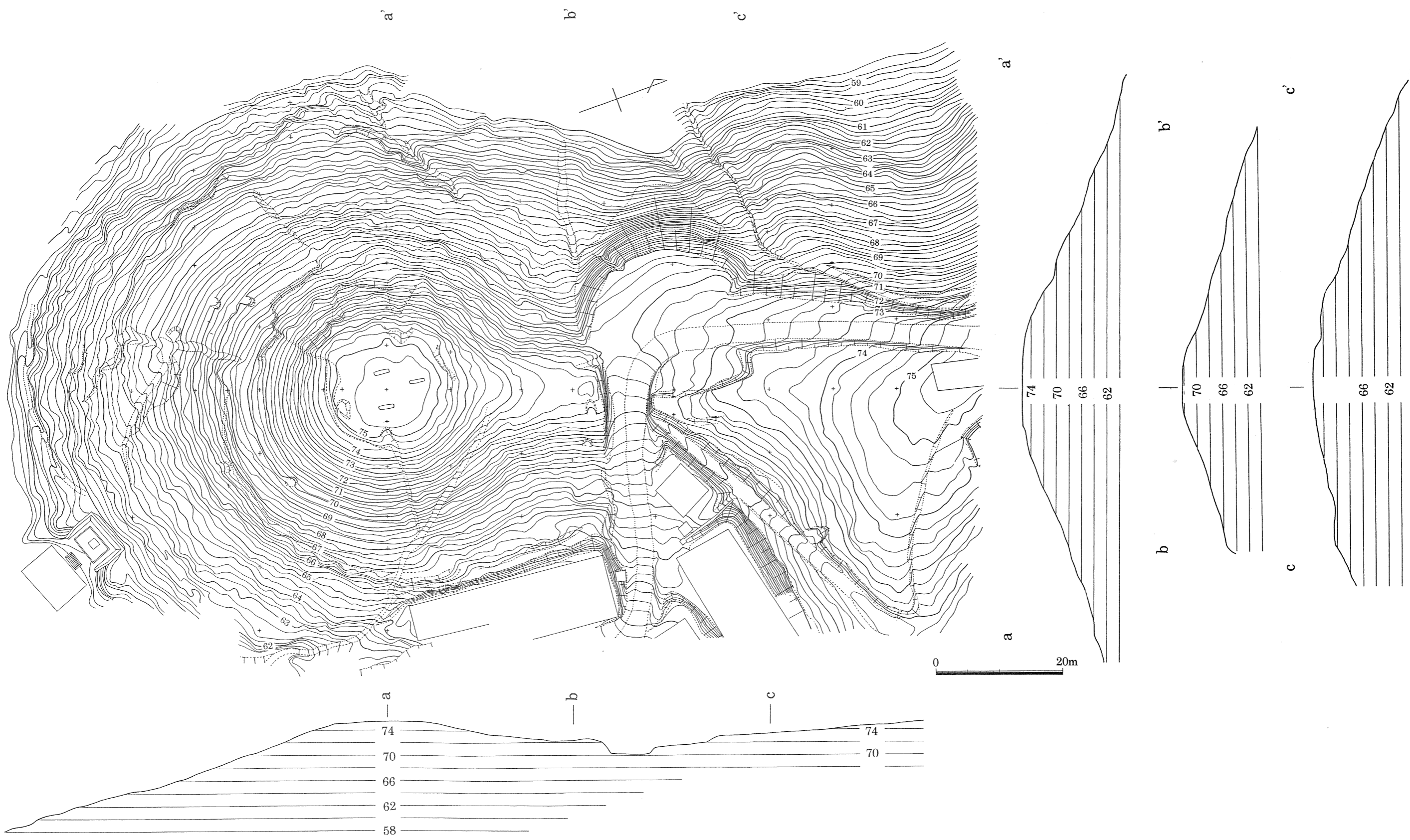
《墳丘形態と外表施設》

上記したように、今回の測量調査だけでは必ずしも墳丘各部の数値を確定することや、それ以上に墳丘形態の詳細を検討することは難しいが、墳丘形態と付帯施設・外表施設に関する調査時の観察所見について簡単に述べておく。

既に述べたように、後円部の平面形は墳丘主軸方向、すなわち尾根線方向にやや間延びした楕円形を呈する可能性が高い。前項で述べたように周辺地形を考慮すれば、後円部径の 3 分の 2 程度のやや短小な前方部を復元することになる。なお農道切断面の観察によれば前方部は基本的に地山を削り出して成形された可能性が高い。

また墳丘基底レベルは後円部南半ではほぼ水平となるが、くびれ部から前方部中位付近で 2 m 前後上昇するようだ。地形を考慮すれば、前方部前端レベルは相当高くなるものと思われる。この点も立地条件とともに本墳の重要な特徴の一つとなるだろう。

前項で前方部東面において、墳端ラインより上位に、今一つの傾斜変換点を見出せることを述べたが、このラインは地表面観察では非常に微妙だが後円部東面に向けて、基底部レベルの傾斜に並行して連続するように見える。南面から西面ではうまくその延長を追求することができないが、これを積極的に評価すれば後円部から前方部に連続する低い段を想定することができるであろう。推定墳端レベルとの比高は 1.5～2 m 程度で墳丘基底を巡る基壇状の小テラスが取り付く



第 19 図 快天山古墳墳丘測量図 (平成 13 年測図 1/600)

可能性がある。

また後円部南面では延長 15 m 程の範囲でこれより高い標高 69.5 m 付近に幅 1 m 内外の帯状平坦面を見出すことができる。既に述べたように後円部南～東斜面一帯は開墾時にかなり改変を蒙っていることと、この平坦部が現状では東西に連続して捉えられることから、判断は難しいが後円部中位にもう一段テラスが想定できるかもしれない。

また、前方部東面の農道切断部に接する部分で標高 68～68.5 m 付近に南北 5 m、東西 3 m の比較的明瞭な方形壇を観察することができる。農道開削時の残土集積の可能性もあるが、注意しておきたい。

前回調査時の測量図では後円部南面裾とくびれ部西斜面に葺石が図化されている。現状では後円部南面の裾から墳丘外方ではごく疎らに拳大～人頭大の角礫・亜円礫の散乱を認めるが、原位置ないしはそれを反映するような状況は観察できない。くびれ部西面では明らかな墳丘外に二次的な葺石様石材の集積を認めるが、墳丘斜面では見出しがたい。また、前方部の墳丘切断面でも葺石を観察することができない。葺石の施工は認めうるが、その範囲や様態を推測することはむずかしい。

測量時に墳丘各所で円筒埴輪および器種不明の土師器片を採集したが、特定地点にまとまる傾向は見出せなかった。なお採集資料に明らかな形象埴輪を認めないことと、採集資料に中形壺の可能性のある土師器片が一定量含まれる点は注意しておきたい。

注

- 1) 1951 年に刊行された前回調査報告（注 2 文献）には縮尺 1/800、2 m 等高線の墳丘略測図が掲載されている。また筆者は綾歌町教育委員会所蔵の快天山古墳前回調査記録写真の一枚に、報告書掲載図とは異なる墳丘測量図が写っているのを 2001 年夏に確認した。写真では測量図に「横山浩一実測」と注記されているが、現在同図の所在は明らかではない。1951 年の京都大学調査時の測図であろう。
- 2) 和田正夫 松浦正一『史跡名勝天然記念物調査報告 第 15 快天山古墳発掘調査報告書』香川県教育委員会 1951
- 3) 寺田貞次「讃岐に於ける前方後円墳について」『考古学雑誌』25—5 1935
- 4) 三谷寿夫『栗熊史談』1938
- 5) 注 4 文献 20 頁に以下の記述がある。
「次に快天山頂上より峯続き約半町位の所に古墳一個を開墾に依って発見した。石箱即ち組合式の石槨（角閃安山岩）でその組合した石は巨大である。副葬品としては漢式鋸齒文鏡の破片及び埴輪円筒其の他土器破片を発掘した。」
また地元のお年寄りから、かつてその辺りに高まりが存在した旨を、2001 年春に筆者も伺った。しかし、厳密な位置関係は不明で、前方部端の隆起をこのように理解したのか、あるいは、前方部に接して別の墳丘が存在したのか、現時点では判断できない。
- 6) 現在 3 基の石棺主軸は墳丘主軸から 14° 内外西に偏し、ほぼ N 5° E となる。先に述べた墳丘主軸方位を考慮すれば、このズレは敢えて棺埋置に関する方位規制の厳格な遵守を指向した可能性があり、興味深い。
- 7) 前回調査報告の本文では後円部高 8 m と記述するが、付載測量図を読む限りでは後円部南側から測って高さ 10 m となる。誤植か。

〈追記〉

測量調査の後、2001年夏から綾歌町教育委員会では、墳丘確認調査を開始した。本稿で推測した測量調査所見の補正などは、今後の確認調査報告で果したい。

付章2 快天山古墳石棺の再検討及び 最近の刳抜式石棺の調査例について

香川県立歴史博物館 渡部 明夫

1. 快天山古墳石棺の再検討

快天山古墳の3基の石棺については、旧稿¹⁾において、1号・2号石棺と3号石棺の形態に差異が認められ、3号石棺の形態や1号・2号石棺から3号石棺への形態変化の方向性が後出する石棺に継承されること、1号・2号石棺が石槨に納められるのに対して、3号石棺はより簡略化したと考えられる粘土槨に埋置されていることなどから、1号・2号石棺が3号石棺に先行すると共に、割竹形木棺の形態にもっとも近い1号・2号石棺を最古の刳抜式石棺とした。

この点について、本報告書で詳細な実測図が公表されることから、改めて3基の石棺の検討を行い、旧稿を再検討したい。

旧稿では主に『香川県史跡名勝天然記念物調査報告 第15集』²⁾の報告に基づき、快天山古墳の3基の石棺を以下のように整理した。

1号・2号石棺は、縄掛突起を除くと、平面形が長方形を呈し、棺身と棺蓋を合わせた横断面が円形で、いわゆる割竹形をなし、棺蓋・棺身の刳り込みは、横断面が半円形に近い形で、短辺部の平面形が弧状となる。

これに対して、3号石棺は、棺蓋・棺身とも、足部の幅が狭くなるとともに、棺蓋は高さを加え、その横断面は円の中心より下位で横切りした形を呈し、刳り込みは、短辺部の平面形が矩形となり、横断面は隅丸形状であるなどの形態的特徴をもつ。

つまり、快天山古墳の石棺は、棺蓋と棺身を合わせた外形が円柱形で、刳り込みの短辺部が弧状を呈し、刳り込みの横断面が半円形に近いものから、足部の幅が狭く、棺蓋が高くなり、刳り込みの短辺部が矩形をなすとともに、その横断面が隅丸形状になるものへと変化したと考えた。

今、改めて本報告にある快天山1号～3号石棺の実測図から、形態の特徴をみると、以下のようによまとめることができる。

1号石棺

- ① 棺蓋・棺身とも、平面形は中央部がやや膨らんだ長方形を呈し、両端に太い棒状の縄掛突起をもつ。
- ② 棺蓋の横断面は、幅に対して高さのやや高い半円形状をなす（横断面図部分で、高さは幅の約57.5%³⁾）。
- ③ 棺身の底部は完掘していないが、幅に対して高さがやや高い半円形状と考えられる（横断面図部分で、高さは幅の約59.1%と推定される）。底部の横断面は円弧状をなすと推定されており、側部は底部から急カーブで立ち上がり、直立気味にのびて、上端付近でわずかに内傾する。

- ④ 棺蓋と棺身をあわせると、幅に対して高さがやや高い（横断面図部分で、高さは幅の約115％）。
- ⑤ 棺身・棺蓋の両端につけられた縄掛突起は正面からみると楕円形を呈し、太い。しかも基部を細くして実用の便を図っている⁴⁾。
- ⑥ 棺身の刳り込みの短辺部は、平面形が隅丸方形状をなす（棺蓋は不詳）。
- ⑦ 棺身の刳り込みの横断面は外開きの台形状を呈する。棺蓋の刳り込みの横断面は、本報告の実測図では半円形であるが、調査時の写真によれば外開きの台形状を呈する⁵⁾。

2号石棺

- ① 棺蓋・棺身とも、平面形は1号石棺と同じく、中央部がやや膨らんだ長方形で、蓋の両端に太い棒状の縄掛突起をもつ。身には縄掛突起をもたない。
- ② 棺蓋の横断面は、幅に対して高さがわずかに高い半円形状である（横断面図部分で、高さは幅の約54.1％）。1号石棺と比較すると、頂部がやや広い弧状をなす。なお、頭部側端部では側部下端部分が内湾する。
- ③ 棺身の外形は、側部が低く、わずかに内傾気味に直立し、底部は緩くて広い弧状を呈する。横断面図部分での高さは幅の約50％であるが、横断面は浅いU字形を呈する。1号石棺と比較すると、側部は底部から緩やかに立ち上がり、低い。底部は幅が広い。
- ④ 棺蓋と棺身をあわせると、高さと同幅がほぼ等しい（横断面図部分で、高さは幅の約102％）。しかし、平底気味の弧状の底部をもつため、横断面は円形にはならない。
- ⑤ 棺蓋の両端につけられた縄掛突起は、1号石棺と同じく、正面からみると楕円形を呈して太く、基部を細くして実用の便を図っている。1号石棺に比べるとやや小ぶりの作りであるが、これは石棺の大きさに対応したものと考えられる。
- ⑥ 棺蓋の刳り込みの短辺部は、頭部側・足部側とも平面形が隅丸方形状をなすが、棺身の刳り込みの短辺部は、足部側が弧状を呈し、頭部側が隅丸方形状をなす。
- ⑦ 棺蓋・棺身の刳り込みの横断面は、いずれも外開きの台形状である。

3号石棺

- ① 棺蓋・棺身とも、平面形は足部の幅を狭く作り、両端に棒状の縄掛突起をもつ。
- ② 棺蓋の横断面は、1号石棺と比べて相対的により高くなるとともに、頂部がより狭くなる（横断面図部分で、高さは幅の約62.9％）。横断面図部分では高さの高い半円形状であるが、頭部側の端部では円の中心より下位で横切りした形である。
- ③ 棺身の外形は、横断面が高さの高い半円形状をなす（横断面図部分で、高さは幅の61.4％）。1号石棺に比べて、側部がさらに内傾気味に立ち上がる。特に、頭部付近では側部の上部が屈曲して内傾する。断面図部分では、底部は円弧状に丸くなることから、その横断面は円の中心より上位で横切りした形を呈する。
- ④ 棺蓋と棺身をあわせると、幅に対して高さが高い（横断面図部分で、高さは幅の約122％）。
- ⑤ 棺身・棺蓋の縄掛突起は、全体的に基部の挟りが小さくなっている。棺蓋頭部の縄掛突起

は細く、華奢になり、正面からみると円形を呈する。また、棺身頭部の縄掛突起は、石材の形に規制されて、板状の突起となっている。

- ⑥ 棺蓋・棺身とも、刳り込みの短辺部は、平面形がすべて矩形を呈する。
- ⑦ 棺蓋・棺身の刳り込みの横断面は、いずれも外開きの台形状である。
- ⑧ 造り付け石枕は、1号石棺・2号石棺の石枕と比較すると、石枕を形づくる突帯が細くなり、さらにその外側に二重の細い突帯を巡らし、より装飾的につくっている。

1号石棺と2号石棺の比較

旧稿では1号石棺と2号石棺を同一形態として扱ったが、上述した形態の特徴から、次のような両者の差異が明らかになった。

棺蓋の外形はともに横断面が半円形状を呈するが、2号石棺に比べて1号石棺は相対的に高さが高く、頂部は狭くなっている。

2号石棺の棺身は、高さが幅のほぼ1/2で、緩くて広い弧状の底部をもつものに対して、1号石棺の棺身は相対的により高くなり、底部もより狭くなる。棺身の側部については、2号石棺では低く、底部から緩やかに立ち上がるのに対して、1号石棺ではより高くなり、底部から急カーブで立ち上がっている。

棺蓋・棺身の刳り込みの平面形についてみると、2号石棺では棺身足部側の端部を唯一弧状につくり、他を隅丸形状につくるのに対して、1号石棺では、棺蓋は明らかでないものの、棺身は隅丸形状につくる。

1号石棺の刳り込みの立面形は、棺蓋・棺身とも2号石棺より急角度となり、垂直に近づいている。

前述したように、1号石棺の実測図によれば、棺蓋の刳り込みの横断面は半円形状であるが、県の調査時の写真によれば外開きの台形状である。相違の理由は明確ではないが、断面をとった場所によるものかもしれない。ここでは写真に基づき、1号石棺の棺蓋の刳り込みの横断面は外開きの台形状を基本としているものと考ええる。従って、1号石棺と2号石棺の蓋の刳り込みの横断面の形は共通していることになる。

また、石棺の平面形や縄掛突起、造り付け石枕などの形態は1号・2号石棺で共通しており、両者に類似点も認められる。

快天山古墳における刳抜式石棺の形態変化

2号石棺と1号石棺との形態的差異を明らかにすることができたので、さらに3号石棺との関係を見ることにしたい。ここで3基の石棺に一定の形態変化が認められると、快天山古墳における刳抜式石棺の変遷を明らかにすることができる。

まず、棺蓋の外形についてみると、2号石棺→1号石棺→3号石棺へと幅に対する高さの比を増し、横断面が半円形に近いものから、相対的に頂部がより高く、狭いものへと変化している。

棺身の外形についても、2号石棺→1号石棺→3号石棺へと幅に対する高さの比を増し、緩くて広い弧状の底部をもつもの（2号石棺）から、相対的により高くなり、円弧状の底部を持つもの

(1号石棺)、さらに相対的に高くなり、底部がより狭くなるもの(3号石棺)へと変化している(第20図⁶⁾参照)。

棺身の側部については、低いもの(2号石棺)から、比較的高いもの(1号石棺)、比較的高く、上部が屈曲して内傾するもの(3号石棺)への変化が想定できる。

刳り込みの短辺部については、平面形が隅丸形状の刳り込みを基本としながらも、棺身足部側に弧状の刳り込みを残す2号石棺から、隅丸形状の刳り込みをもつ1号石棺棺身(棺蓋は不詳)、矩形の刳り込みをもつ3号石棺への変化が認められる。

棺蓋・棺身の刳り込みの角度をみると、横断面では1号石棺と3号石棺に顕著な差が認められないが、2号石棺と比べると刳り込み角度がより垂直になっている。これを縦断面でみると、2号石棺がもっとも緩く、さらに1号石棺→3号石棺へとより垂直に近づいている。

次に、1号・2号石棺で共通し、3号石棺と異なる形態的特徴をみると、まず、石棺の平面形については、1号・2号石棺が中央部がやや膨らんだ長方形を呈するのに対して、3号石棺は足部の幅を細くつくっている。

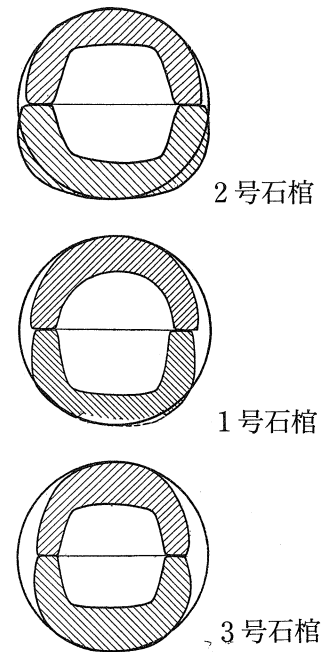
造り付け石枕についてみると、1号・2号石棺とも幅広の突帯で馬蹄形状につくるが、3号石棺では石枕を形づくる突帯が細くなり、さらにその外側に二重の細い突帯を巡らし、より装飾的である。

縄掛突起は、1号・2号石棺が基部を挟った太い楕円形の縄掛突起をもつものに対して、3号石棺では、全体的に基部の挟りが小さくなり、一部に細い円形の縄掛突起を採用している。

以上のように、棺身・棺蓋の形態や、刳り込み短辺部の平面形、刳り込みの角度などが2号石棺→1号石棺→3号石棺へと変化し、石棺の平面形・造り付け石枕・縄掛突起などが2号石棺・1号石棺→3号石棺へと変化していることが明らかになった。

ところで、刳り込みの短辺部を矩形につくること、刳り込み角度が垂直化する傾向、足部を細くつくる石棺の形、円柱状の縄掛突起、造り付け石枕の装飾化などの3号石棺の特徴は、新しい時期の刳拔式石棺に受け継がれており、棺蓋が相対的に高くなり、頂部が狭くなる傾向は、後に棺蓋の屋根形化につながり、3号石棺の棺身上部が内傾する特徴は、屈曲部が後に磨白山古墳⁷⁾をはじめとする棺身の突帯へと変化するものと考えられる⁸⁾。

以上のことから、快天山古墳の3基の刳拔式石棺は、2号石棺がもっとも古く、次いで1号石棺がつくられ、最後に3号石棺が作られたと考えられる。その結果、快天山石棺から見た最古の刳拔式石棺の形態は、旧稿で考えたような円柱形をした石棺ではなく、棺蓋の横断面は半円形を呈するものの、広く緩い弧状の底部をもち、側部が短く立ち上がった棺身をもつものであった。



第20図 快天山古墳石棺の形態変化
(3棺の蓋と身の高さを等しくして円内に図示)

3基の石棺のうち、2号石棺と1号石棺にいくつかの共通する特徴があり、1号石棺と3号石棺との差異が比較的大きいことは、2号石棺がつくられた後、1号石棺が比較的近接した時期につくられ、さらに3号石棺がやや時期をおいて作られたことを示しているのであろう。

また、1号石棺と2号石棺が後円部のほぼ中央に併置され、ともに石槨に覆われていたのに対して、3号石棺がやや前方部寄りに位置し、より簡略された葬法である粘土槨に埋置されていたことは、1号・2号石棺にくらべて3号石棺の埋置が遅れたことを示すものと考えられる。

2号石棺と1号石棺については、製作の順序に埋納された可能性が高いものの、両石棺の形態や埋葬施設、埋葬位置に共通点が多いことから、同時に埋置された可能性もある。

いずれにせよ、3基の石棺の埋納順序については今後の発掘調査で確定する必要がある。

快天山古墳石棺の評価

以上のように、快天山古墳石棺は2号石棺→1号石棺→3号石棺へと変化したと考えられるが、変化の方向がほぼ一定していること、変化に大きな断絶や飛躍が認められないことから、これら3基の石棺は特定の技術者集団によって、特定の工房で、石棺や石棺製作の理念、石材加工技術などを濃厚に継承しながら製作されたものと想定される。

それを可能にしたのは、旧稿でも指摘したように、快天山古墳石棺の製作が刳拔式石棺の中でもっとも古く、他に高度な技術を有する石棺製作技術集団が存在しなかったため、外部からの強い影響を受けなかったためであろう。

3基の石棺の製作技術については、今後の石棺の再調査によらなければならないが、いずれにせよ、2号石棺を最古とする快天山古墳の3基の刳拔式石棺は、わが国でもっとも古い石工集団が製作した石棺の具体的内容を示す貴重な資料であり、後の長持形石棺や家形石棺を生み出す石材加工技術のもとになったことに重要な意味がある。

しかも、初期の刳拔式石棺が畿内中枢部の大型前方後円墳から発見されていないことからすると、刳拔式石棺の創製に畿内政権が直接関与した証拠はなく、それが讃岐の地で開始され、後に古墳の墓制に大きな影響を及ぼしたことは、古墳文化のありかたや当時の畿内政権と地域との関係を考える上からも注目すべきことである。

2. 岩崎山4号古墳の刳拔式石棺について

ところで、大川郡津田町の岩崎山4号古墳の刳拔式石棺は、この種の石棺には珍しく、棺身の両端部に石枕を造りつけ、合葬を意図して製作されている。

火山系の凝灰岩⁹⁾を用いてつくられたこの石棺は、北側がやや幅広となり、南側を細くつくること、石枕が装飾的であること、棺蓋に「田」字状の突帯をつけ、棺身の両側に一条の突帯をもつことなど、快天山古墳1号・2号石棺より新しい特徴をもつ。

突帯をのぞくと、棺蓋・棺身とも横断面が半円形に近く、棺蓋と棺身を合わせると円柱形を呈する。棺蓋・棺身とも合わせ口の近くに巡らされた突帯部分が最大幅となり、突帯から合わせ口までの外面は内傾する。幅に対する高さの比は、棺蓋で約46.8%、棺身で約50.3%、幅に対する

棺蓋と棺身を合わせた高さの比は約96.4%である。なお、最古の刳抜式石棺が整った円柱状を示さないことは、快天山古墳2号石棺で見たとおりである。

刳り込みは、棺身の横断面が長方形を呈し、棺蓋の横断面がやや外開きの台形をなし、そのコーナーは角をもつ。棺蓋・棺身とも刳り込みの縦断面は長方形である。

岩崎山4号古墳石棺を特徴づけるものに、棺蓋・棺身に施された突帯がある。突帯は幅約4cm、高さ2～3cmで、基部がやや幅広の長方形を呈する。棺蓋の突帯は、上面から見ると、合わせ口付近と両端付近を「口」字状にめぐり、さらに棺蓋の頂部と中央部で突帯を交差させて「田」字状に巡らせる。棺身の突帯は合わせ口付近を水平にめぐる。

合わせ口付近に突帯をめぐらせる石棺は大阪府柏原市安福寺石棺¹⁰⁾をはじめ、鷲ノ山石を用いた石棺に多いが、高松市石清尾山石船塚古墳石棺¹¹⁾の突帯は幅広くなり、棺蓋と棺身の側部が垂直に合わさっているため、岩崎山4号古墳石棺よりやや新しく位置づけることができる。善通寺市磨臼山古墳石棺の突帯は細く、突帯から合わせ口までの外面は緩く内傾し、石枕に勾玉状の陽刻をもつなど、岩崎山4号古墳石棺との類似性が大きいことから、両者は近接した時期に位置づけられると共に、突帯をもたない快天山古墳3号石棺より新しくなるものと思われる。

3. 刳抜式石棺の最近の調査について

ここでは、旧稿を公表した平成6年以降の香川県産石材に関する刳抜式石棺の調査等を紹介する。

大阪府久米田貝吹山古墳

久米田貝吹山古墳¹²⁾は大阪府岸和田市池尻町に所在し、古墳時代前期から中期の古墳群である久米田古墳群の中で、前期の有力首長墳とみられる前方後円墳である。

墳丘は全長約130m、後円部直径約75mを測る。後円部から破壊された竪穴式石室と赤色顔料が塗られた白色凝灰岩の石棺破片が検出され、刳抜式石棺を納めた竪穴式石室が構築されていたと考えられている。

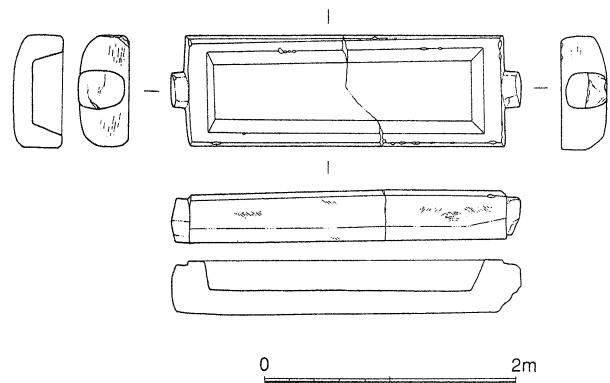
刳抜式石棺は石材を再利用するために分割・搬出されたようで、全体の形態を知り得ないが、3面に顔料が残っていて棺蓋か棺身の縁部と思われるもの、石枕の可能性のあるわずかな抉りをもつもの、縄掛突起の一部と思われるもの、表面に何らかの文様が彫られたものなどがあると考えられている。

円筒埴輪のほか、副葬品として銅鏡片・鍬形石1個体以上・車輪石3個体以上・石釧2個体以上・碧玉管玉約40点・銅鏃13・刀剣・鉄鏃・小札革綴冑の一部と思われる小札・鉄斧などが出土した。

凝灰岩は大川郡津田町などに産出する火山系の石材と考えられており、火山系の石材を用いた刳抜式石棺としては、畿内で初めて確認されたものである。調査概報の写真によれば、やや幅広の低い突帯をもつ石棺破片があり、突帯をもった石棺が用いられたものと思われる。突帯がやや幅広で低いとすると、岩崎山4号古墳石棺より新しい時期のものと考えられる。

徳島県大代古墳

香川県と徳島県を区分する阿讃山脈の東端南麓の尾根上に位置する前方後円墳¹³⁾で、徳島県鳴門市大津町大代字日開谷に所在する。墳丘規模は全長約 54 m、後円部直径 31~45 m、前方部長約 23 m で、後円部に長さ 3.7 m、幅 1.0~1.1 m の竪穴式石室が南北に構築され、その内部に刳拔式石棺(第 21 図)を納めていた。



第 21 図 徳島県鳴門市・大代古墳の石棺

石棺の蓋は残されていないが、棺身は両端に短い縄掛突起を有し、縄掛突起を含む全長は 2.84 m、幅 0.87 m、高さ 0.42 m を測る。浅い舟底状を呈する広くて平たい底部に、直立する側部をもつ。刳り込みの平面形は、北側がわずかに広い長方形で、横断面は外開きの台形、南側小口壁のみ垂直近く立ち上げる。刳り込みの各コーナーは明瞭な角をもつ。石枕はみられない。外底面を除いて水銀朱の塗布が認められた。

火山系の凝灰岩を用いたと考えられている。現在のところ火山系石材を用いた刳拔式石棺に類似した棺身は認められないが、鷲ノ山石を用いた石棺と比較すると、棺身の横断面は高松市三谷石船古墳石棺¹⁴⁾に近く、両者は相似た時期に比定されよう。

円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・鞍形埴輪とともに、盗掘埋土中を中心に獣形鏡片・凝灰岩製管玉 5・滑石製白玉 538・銅鏃 7・鉄鏃 26・鉄剣 1・鉄剣片 10・鉄刀片 4・鉄矛片 7・長方板革綴短甲 1・鋤先 2・鉄斧 5・刀子 15・鉋 16・手鎌 1・鉄鑿 2 などを出土したほか、主体部墓壇を切った土坑から碧玉製勾玉 2・凝灰岩製管玉 10 が出土した。円筒埴輪は川西氏の編年¹⁵⁾の II 期に比定している。

高松市長崎鼻古墳

高松市屋島西町屋島国有林 26 林班は 3 小林班に所在する前方後円墳¹⁶⁾で、古代には島であった屋島の先端(北端)に立地する。全長 45 m、後円部径 28 m、同高さ 5 m、前方部最大幅 20 m、同高さ 3.6 m を測り、後円部、前方部とも 3 段築成で、前方部が高いのが特徴である。高松市の確認調査により、後円部に刳拔式石棺を納めた竪穴式石室が確認された。

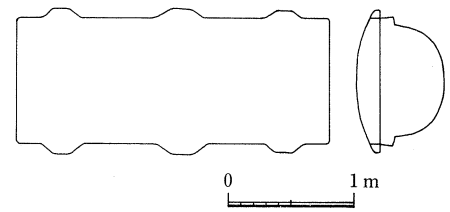
刳拔式石棺は竪穴式石室の盗掘穴にあらわれた一部を検出したのみで、全体の詳細を知ることができなかったが、阿蘇熔結凝灰岩製で、棺蓋は、平面形が低い台形状をした縄掛突起を両長側部に 3 個ずつもち、横断面が低い蒲鉾状を呈する。棺身は両長側部の上端に幅 11 cm、高さ 7 cm の突帯をもち、突帯の上面に棺蓋が被さるものと考えられる。棺身底部の横断面は半円形状をなす。石棺の規模は全長約 2.5 m、縄掛突起を除く棺蓋及び棺身の幅約 1 m、棺蓋の高さ約 0.2 m、棺身の高さ約 0.55 m と推定されている。

第 22 図は、発掘調査時の観察による想定図である。調査者の報告と細部が異なるが、参考のため提示しておく¹⁷⁾。

棺身両長側の上端に突帯を巡らし、半円形状の底部をもつ刳拔式石棺は、福岡県大牟田市密柑山石棺¹⁸⁾や佐賀県佐賀市久保泉熊本山古墳¹⁹⁾、熊本県八代郡竜北町太尾古墳²⁰⁾、八代郡宮原町室ノ山2号墳²¹⁾で出土しており、長崎鼻古墳石棺は熊本県北西部を中心とした地域からもたらされたことが想定される。

長崎鼻古墳の刳拔式石棺は、古式の長持形石棺の蓋を思わせる低い蒲鉾状の棺蓋をもつこと、横断面が半円形状の

棺身をもつと考えられることなどから、5世紀初頭に位置づけられる。香川では、阿蘇熔結凝灰岩製の刳拔式石棺をもち、これまで5世紀中頃～後半と考えられていた観音寺市丸山古墳²²⁾、青塚古墳²³⁾より古く、香川における最古の阿蘇熔結凝灰岩製刳拔式石棺であるとともに、香川における刳拔式石棺製作の最終段階または終了段階での石棺の搬入として注目される。



第22図 高松市・長崎鼻古墳の刳拔式石棺想定復元図
(蓋・短側面、報告図面を一部改変)

註

- 1) 渡部明夫「讃岐の刳拔式石棺について」『香川史学』 19 1990
渡部明夫「四国の刳拔式石棺」『古代文化』 46—6 1994
- 2) 和田正夫・松浦正一『快天山古墳発掘調査報告』香川県史跡名勝天然記念物調査報告 15 1951
- 3) 以下の数値は、図面の計測によるものである。
- 4) 棺蓋頭部側の縄掛突起のみ先端が太くならないが、註2の報文では、石材の余裕がなかったためとしている。製作時またはその後の欠損の可能性もあろう。
- 5) 註2文献の図版第二—3（第一号石棺開棺状況及び綾歌町教育委員会保管の写真による。）
- 6) 第20図は、1号～3号石棺の棺蓋と棺身の高さを等しくし、それぞれの高さ、幅、形の関係を比較したものである。
- 7) 長町章「讃岐国に於ける石枕ある二、三の石棺に就いて（補遺）」『考古学雑誌』 9—10 1919
梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告 12 1933
真鍋昌宏・玉木一枝「磨白山古墳」『香川県埋蔵文化財調査概報』 1984
- 8) なお、棺身上部が屈曲して内傾する特徴は、福岡県嘉穂郡稲築町沖出古墳の石棺にも認められる。従来この石棺は棺蓋の形から、火山系の凝灰岩を用いた石棺群の影響のもとに九州で最初に製作された刳拔式石棺とされていた。古式の火山石系石棺群の棺身がこれまで考えられてきたように半円形であれば、鷲ノ山石石棺群の影響も受けたことになり、再考を必要とする。大川郡津田町赤山古墳の石棺の詳細な検討が必要である。
高木恭二「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』 1987
新原正典・唐木田芳文『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書 2 1989
- 9) 白色凝灰岩は、大川郡津田町火山だけでなく、大川郡から坂出市にかけて採石跡が広く確認されつつあり、火山石石棺群の石材産出地は再検討する必要がある。
- 10) 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告 12 1933
北野耕平『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告 1 1964
北野重『重要文化財安福寺石棺保存整備事業報告』柏原市文化財概報 1996—III 1997
- 11) 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告 12 1933
本田南都子「古墳時代前期の讃岐と畿内」『文化財学論集』 1994
- 12) 吉井秀夫『久米田貝吹山古墳 第1～4次調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告 7 1998

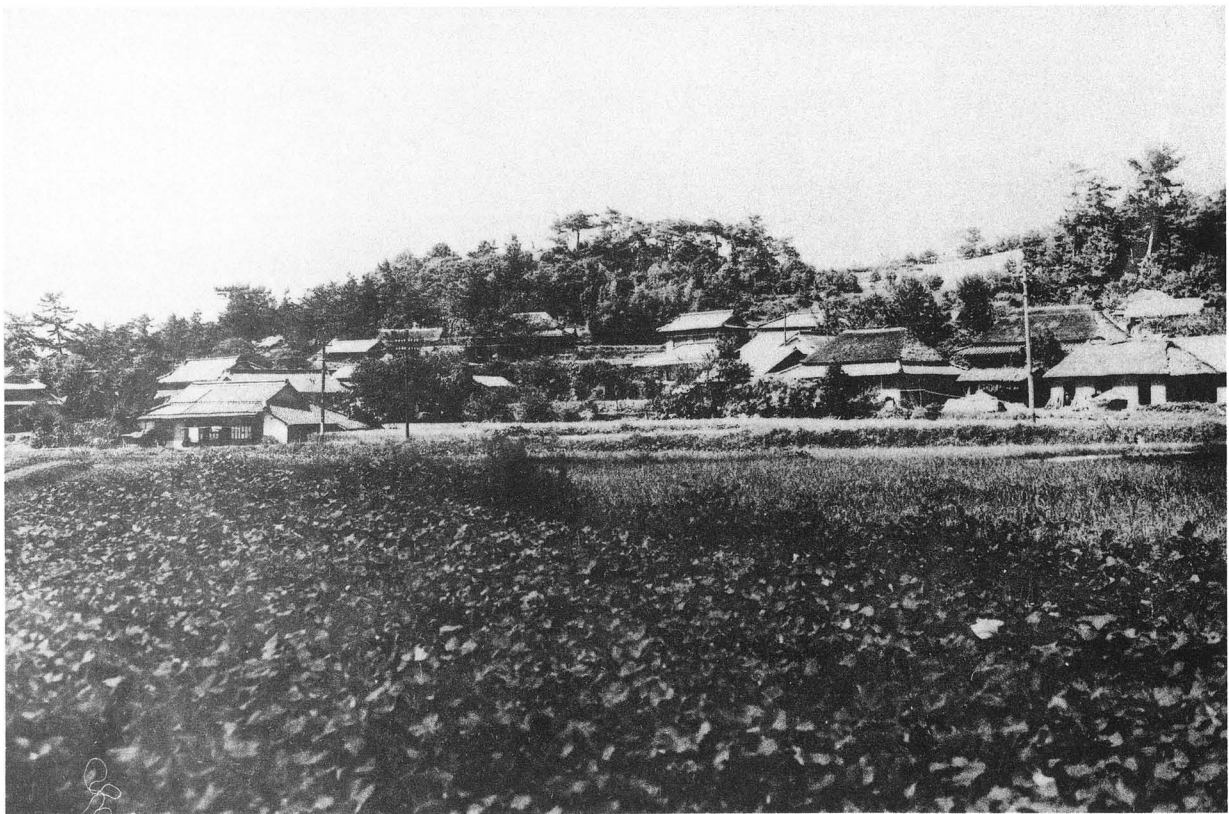
- 13) 幸泉満夫・橋本寿夫「大代古墳」『亜讃山脈東南縁の古墳群 一四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報一』 2001
- 14) 長町彰「讃岐国に於ける石枕ある二、三の石棺に就いて」『考古学雑誌』 9—1 1918
梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告 12 1933
- 15) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』 64—2 1978
- 16) 山元敏裕「長崎鼻古墳」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成 11 年度国庫補助事業一』高松市埋蔵文化財調査報告 45 2000
- 17) 石棺復元の根拠はごくわずかなものであり、想定図は参考図にすぎない。復元図を作成するにあたっては、九州系の同種の石棺を参考に、棺身・棺蓋の長さとは幅は同じと仮定した。なお、棺身は2個の石材を用いている可能性がある。
- 18) 秀嶋龍男「石櫃山古墳」『大牟田市文化財調査報告書』 19 1983
- 19) 木下之治・小田富士雄「熊本山船型石棺墓」『佐賀県文化財調査報告書』 16 1967
- 20) 高木恭二「九州の刳拔式石棺について」『古代文化』 46—5 1994
- 21) 佐藤伸二『室ノ山古墳調査報告』 1976
- 22) 和田正夫「丸山古墳とその石棺」『香川県史蹟名勝天然記念物調査報告』 14 1950
久保田昇三『丸山古墳』観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 1999
久保田昇三『丸山古墳 II』観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 2000
- 23) 藤田憲司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報』 12 1976

圖

版



快天山古墳の遠景（北から）



快天山古墳の遠景（南から）



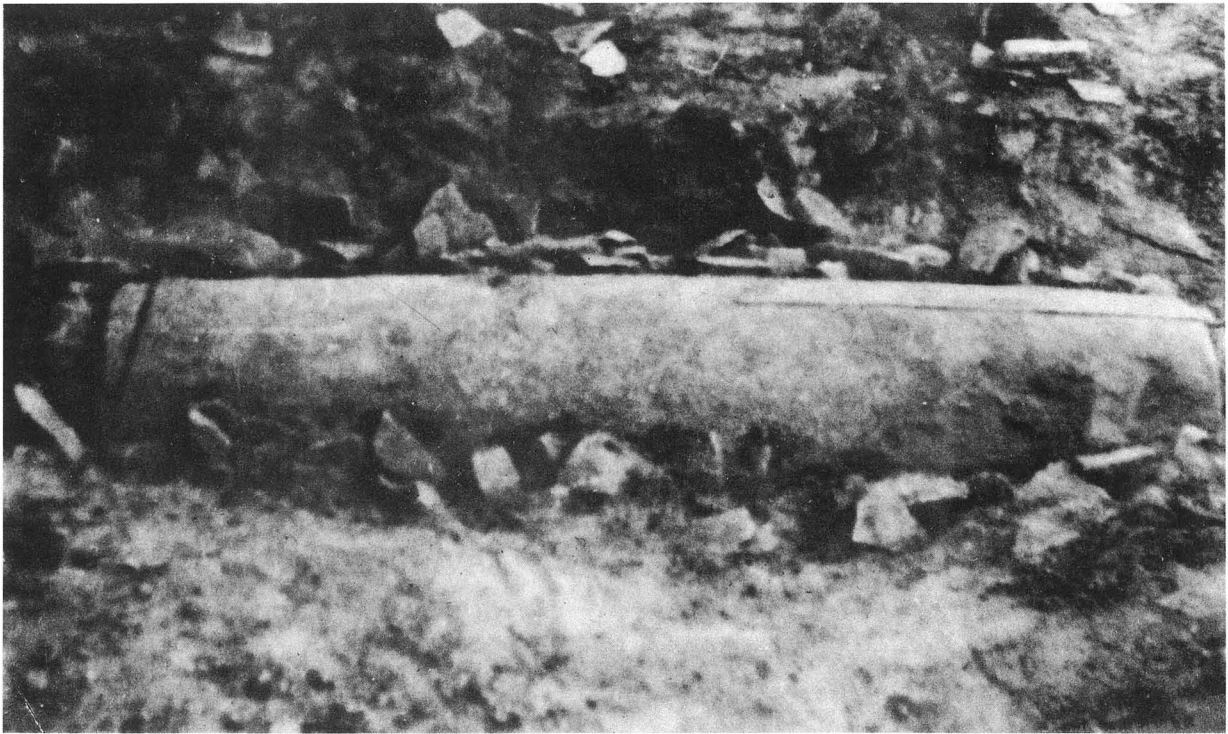
前方部側からみた後円部



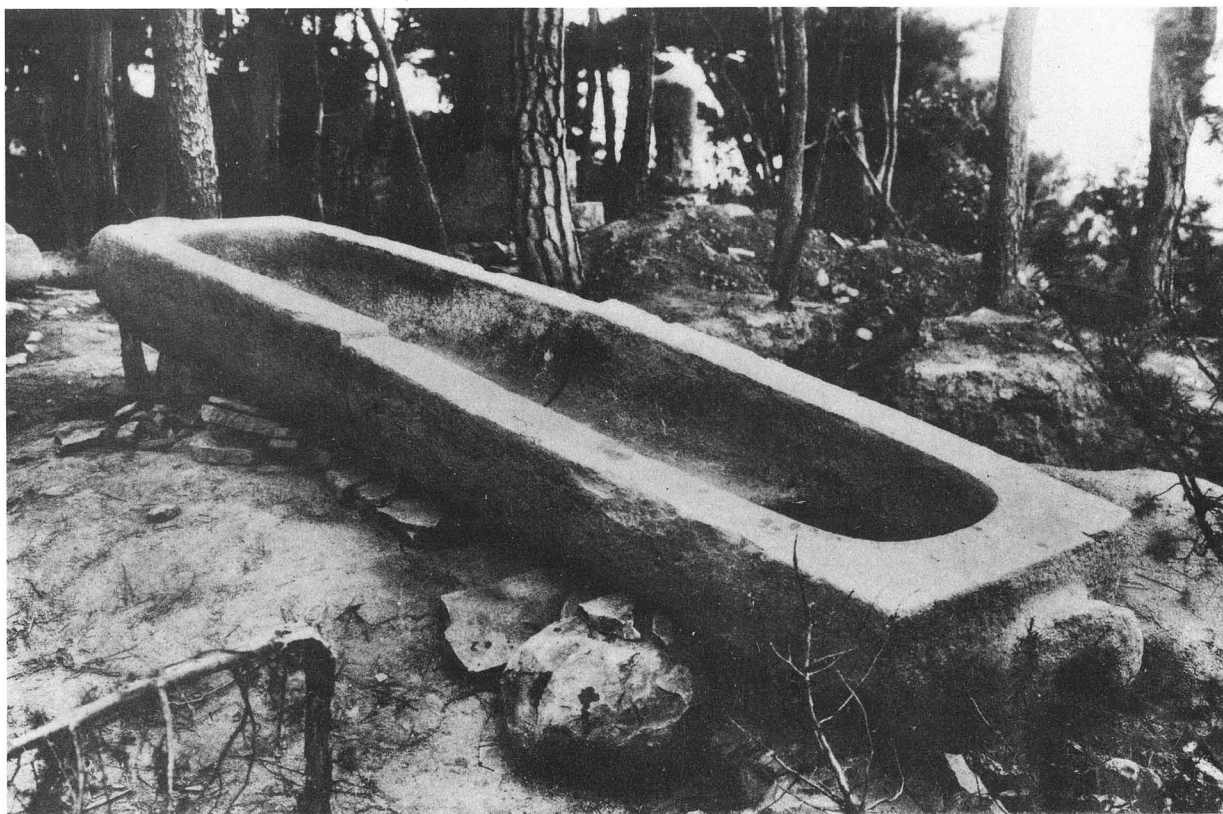
後円部墳頂の快天墓と露出した第1号石棺



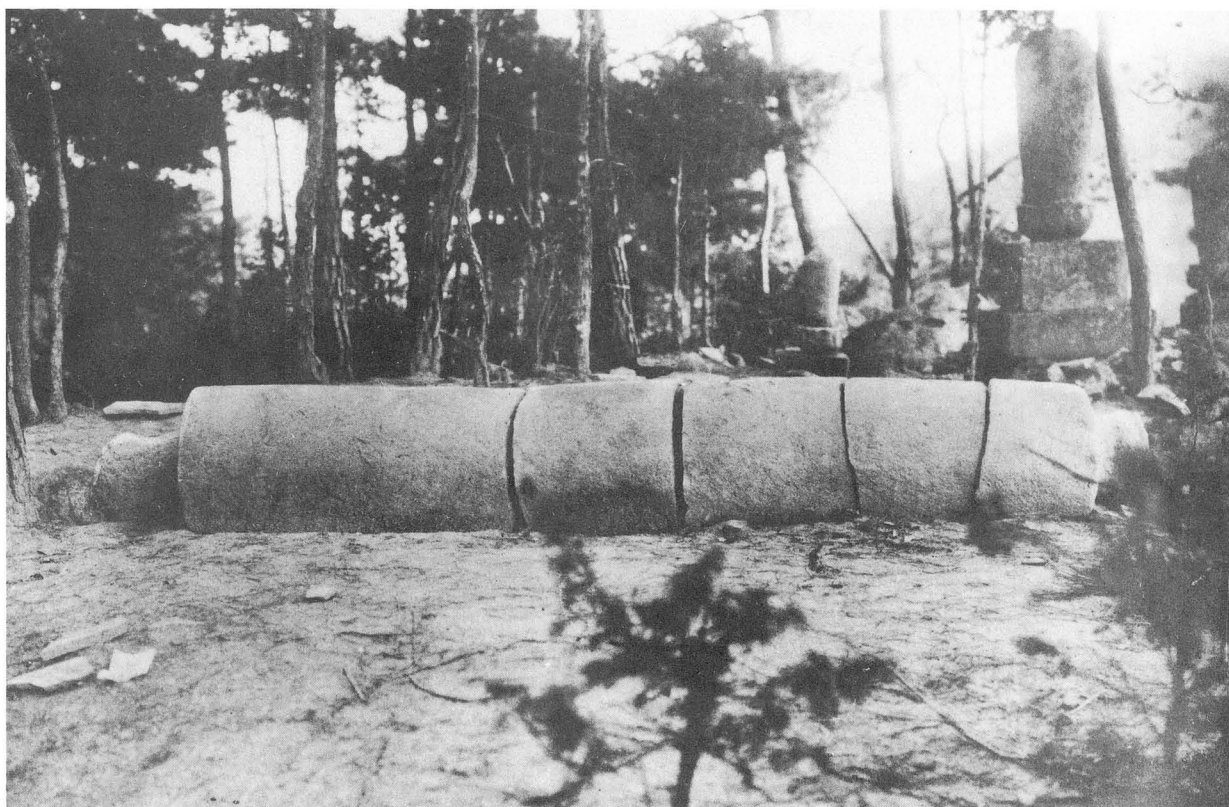
第1号石棺の出土状況（上の左右 石棺身、下 石棺蓋を除去した状況）



第 2 号石棺の石棺蓋と周辺の石積みの検出状況



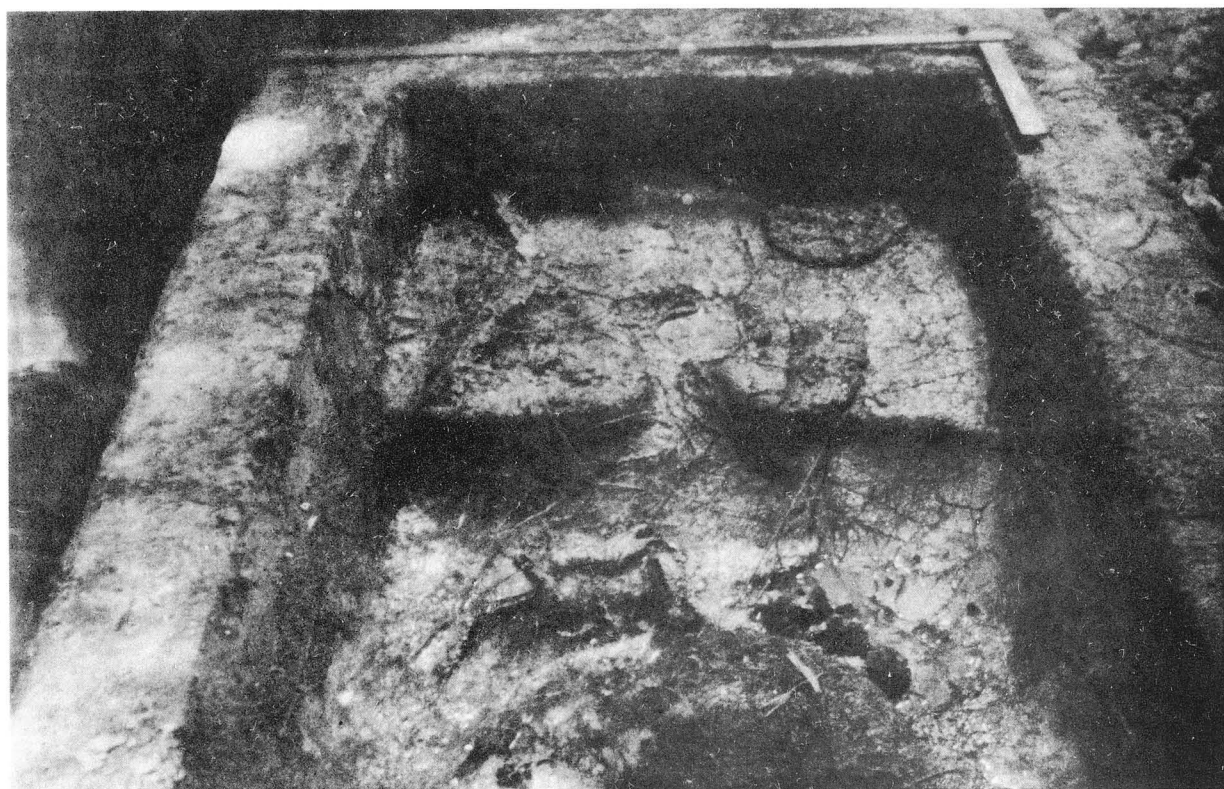
第 2 号石棺 (上 石棺盖、下 石棺身)



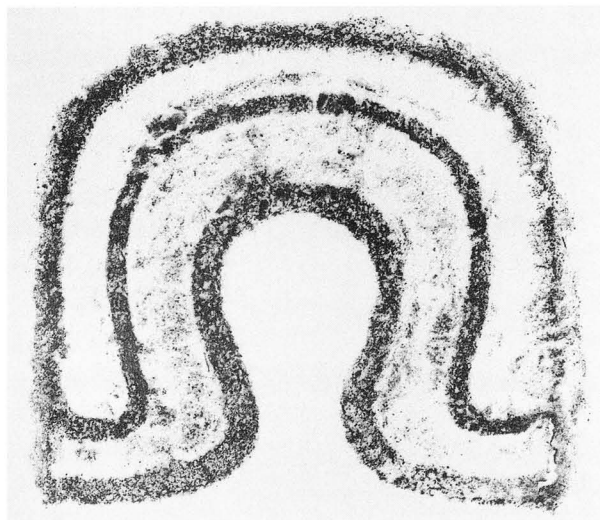
第 3 号石棺 (上 石棺盖、下 石棺身)



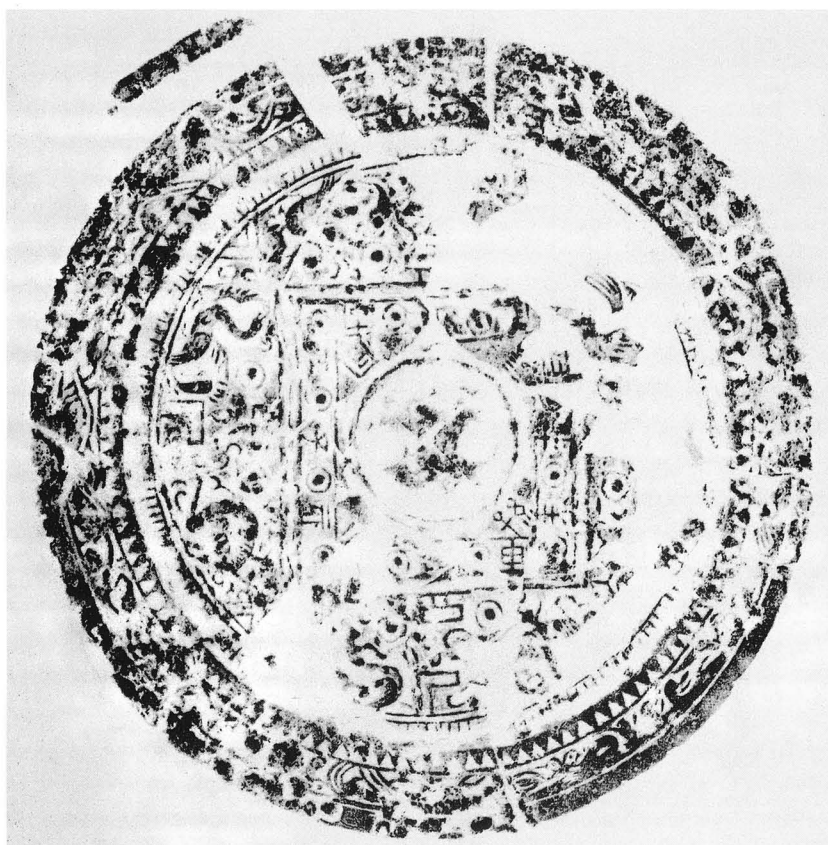
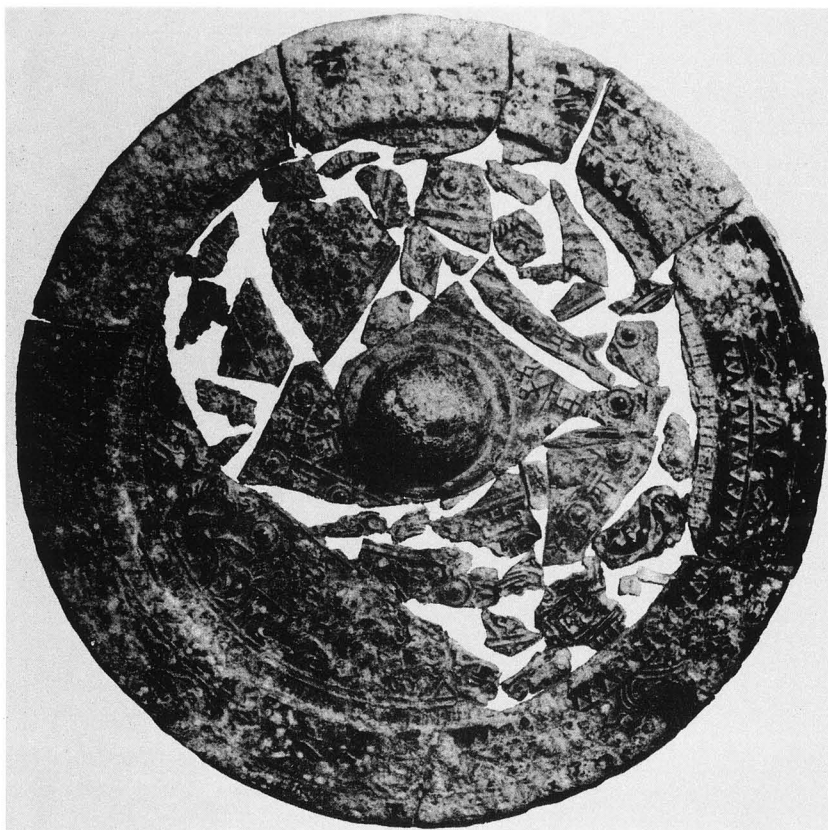
第1号石棺外の方格規矩鏡出土状況



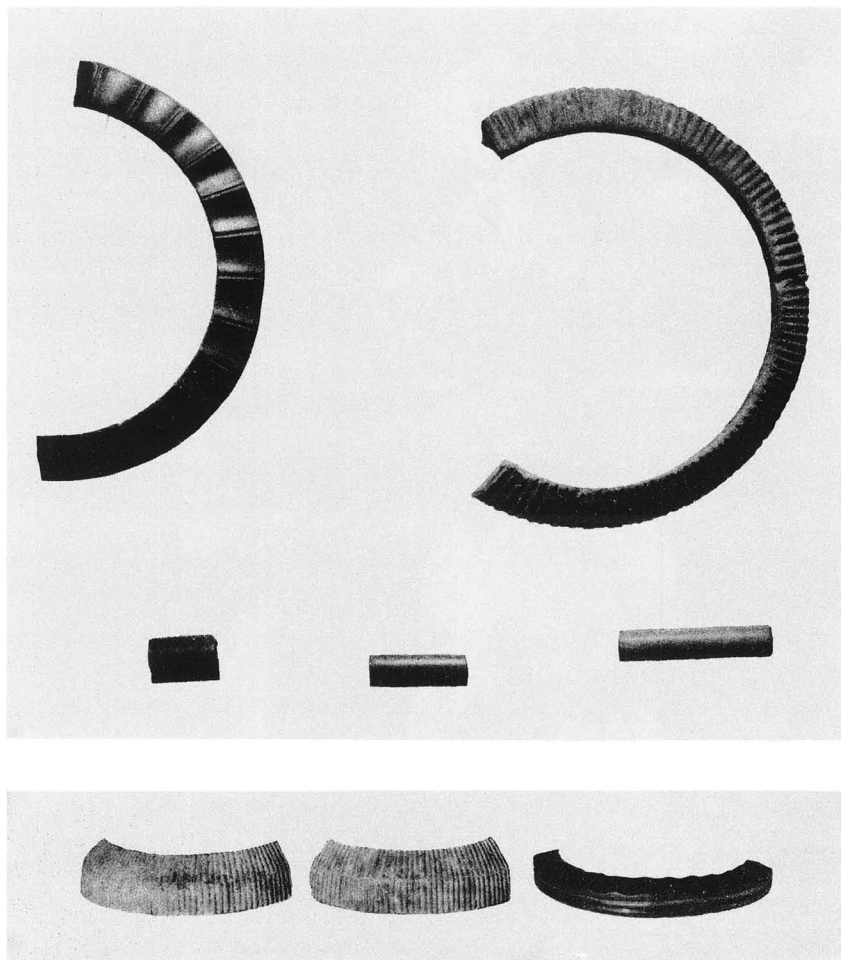
第3号石棺内頭辺部の状況（右隅は内行花文鏡）



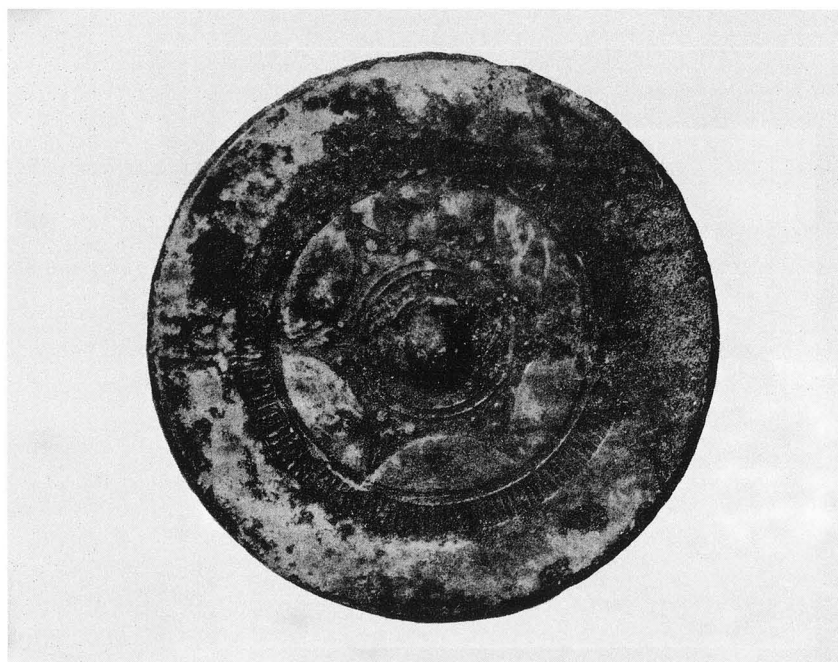
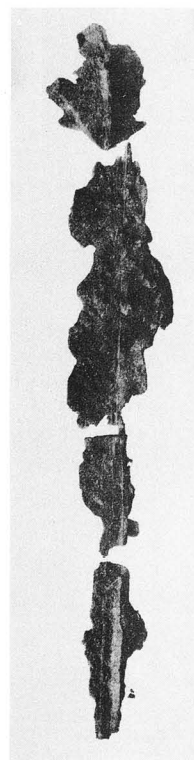
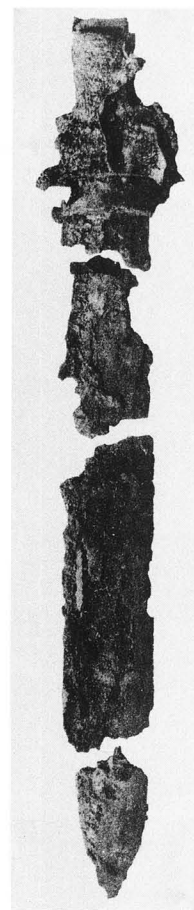
第3号石棺の造り付け枕（下は同上部拓影）



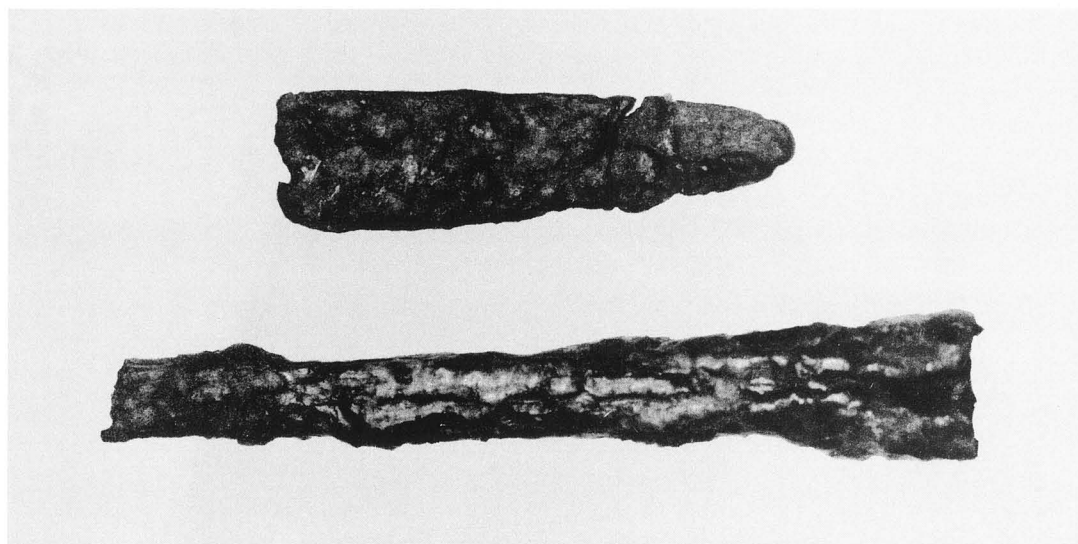
第1号石棺外出土の方格規矩鏡（下は同上拓影）



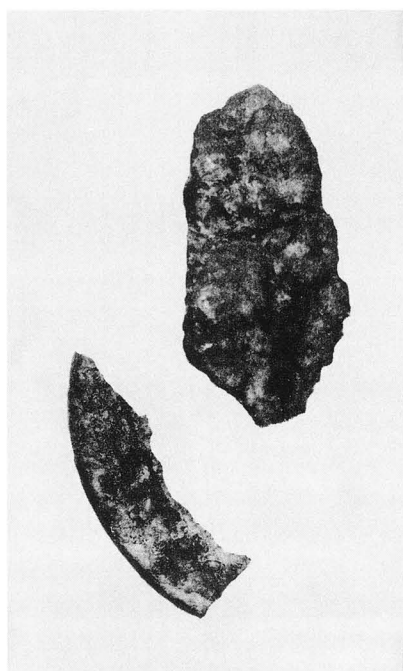
第 1 号石棺出土の装身具類（石釧・管玉）



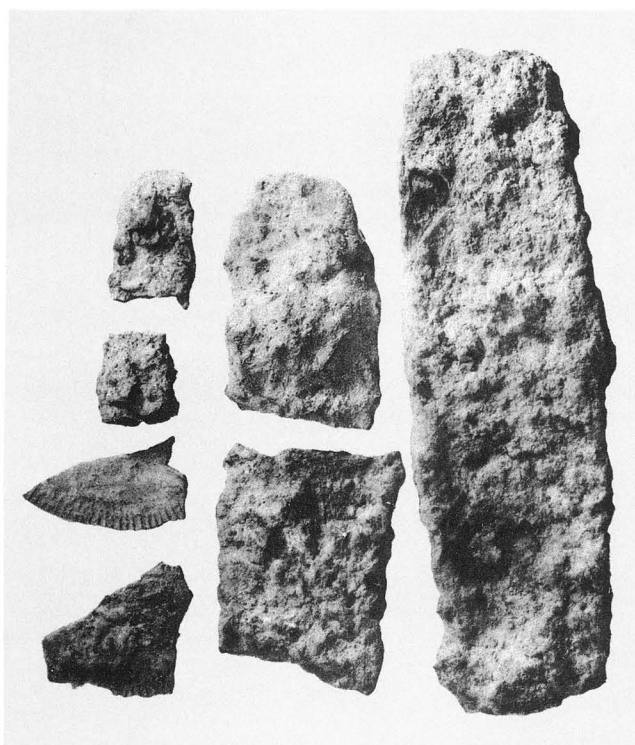
第 3 号石棺出土の内行花文鏡と鉄剣（右の上下）



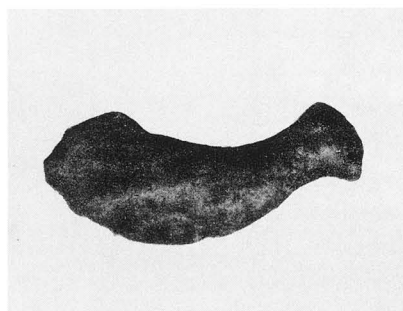
第 3 号石棺出土の鉄鎌・鉄矛



第 3 号石棺出土の鏡片・鉄鎌



第 2 号石棺出土の鏡片・鉄斧など鉄器類



鳥形埴輪

快天山古墳発掘調査報告書

発行日 2002(平成14)年3月31日

編集・発行 香川県綾歌町教育委員会
〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638
TEL (0877) 86-5963

印刷所 電子印刷株式会社
〒730-0853 広島県広島市中区堺町1-1-5